
二人の舞月の住む世界

舞月朝影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の舞月の住む世界

【Nコード】

N6733L

【作者名】

舞月朝影

【あらすじ】

舞月外樹という男がいた。彼はひょんなことから「とある魔術の禁書目録」の世界に来ることになった。それは「観測者」という存在によって仕組まれたものだったが、外樹は「観測者」の敷いたレールから外れ始める。それを好ましく思う「観測者」は新たなレールを敷く。「学園都市」という街に進み、「幻想殺し」などと交差するレールを。

現在コラボ回第1・5章更新中。

Observer's hope.

この世界には、異能を打ち消す右手を持つツンツン頭の少年も、イギリス清教なんていうものも存在しない。学園都市といえば筑波学園都市であって、科学技術がとて進歩した未来都市なんかではない。窓のないビルなんてないし、魔術と科学によって引き起こされた第三次世界大戦なんかもなかった。

だが、平行世界でそれが“あった”と、観測し、体験した者はいた。彼はその世界に偶然旅立ち、そこで己を見極め——向こうの恋人も、仲間も、友人も捨てて“こちら”へ戻ってきた。彼は『観測者』。人であるための“感情”という機能を削りとった機械同然のモノ。彼は不自然にねじれ曲がった歴史を“修正”し、時の流れをもとのルールに戻す役目を負ったただの狗。

とある世界では『守護者』とも言われる存在である彼は——それでも、平行世界の自分に本来の願いを託したかった。未来を選んでしまった自分にはもう取り戻すことのできない、『あちら』での日常。仲間と笑い、愛しあい——

そんな未来を手に入れることができる可能性が0.000001%でもあるのなら、それに託したかった。

そのために、彼は何億もの過去を観測した。既に月日は流れ、彼の『あちら』での記憶は薄れつつある。そもそも——必要のない

ことを忘却する機械には、そんな記憶はすでにないものとなっているのかも知れない。

けれど、ココロはそこに在った。だから、彼は過去の自分に今の自分と同じ未来を歩ませたくなかった。

長い長い観測の末見付け出した方法。成功率0.000000001%以下の賭けに出た。“未来から過去を操作する”という、神ですら行うことはできないことを、神に最も近い彼は幾つもの条件下で、行おうとした。過去の自分がその条件から外れたら、その賭けは失敗する。彼が観測者となり果てて尚、彼に付き添っていた娘はその様本人の代わりに観測していた。

神を超え、時空を越える歴史に残ることのないであろう『奇跡』を。

それは、成功した。

その時、過去の自分は今の自分と違った過去を辿り始めた。

『観測者』は、それを『観測』し始めた。

舞月外樹はその日、初めての異世界渡航を経験することになった。ワイングラスを傾けて赤色の液体を口に含む彼は、この教会の人間ではなかった。

セントジョージ大聖堂。彼の覚えている限りではここまで広く、大規模ではなかった教会の食堂で彼は食事を済ませ、今は窓の外で展開される風景を肴に赤ワインを飲み下していた。

彼がこの場所に来たのは、ほんの二時間前であった。アルコールが体中に行き渡ったことを感じながら、彼はその時のことを思い出していた。

ロンドン近郊に広がる草原は、今その中央で六芒星を描き出している若い男の所有地だった。地面に届くほど長い銀髪をポニーテールにして束ね、それでも尚くるぶしまで伸びるその頭髮が特徴の男は中性的な顔立ちをしていた。その評定はは月光を彷彿とされる白をベースに東洋人特有の真っ黒な瞳と、ピンクの唇の浮かべる笑みに彩られていた。

彼は、“この”世界ではとても有名な魔術師であった。

かのアレクスター・クロウリーが認める、自分をこえる力を持つ“ニンゲン”として魔術師の間では有名であり、一般の間でも天才数学者であり、天才科学者として有名であった。科学者としても魔術師としても一流の彼の経歴は、八歳の頃から二十の頃まで傭兵をやっけて、無傷で無敗ということで一時代を轟かせた。

その傭兵部隊は、他ならぬ彼の手でイギリスの正規軍の仲間入りを果たし、その時を境に彼は傭兵をやめている。そのまま放浪の旅を続ける彼は人脈を作り、世界中の情報が彼のもとに集まるほどになっていた。

その彼が行なおうとしているのは、“新しい”魔術の実験だった。

「術式展開——……したいんだけどなあ、手順踏まないと大規模破壊魔術は作れないしなあ……」

都市一つを破壊するほどの威力を持つミサイル。自動制御の魔術術式を組み立てていた彼は、その言葉を言った瞬間に気を緩めてしまった。

それが、命取りとなる。謝って流れでた微量の魔力は書きかけの魔方陣に“概念”を与え、その概念は世に現出する。そうやってしまったら熟練した魔術師でも止めることはできない。それが、魔術術式というものだ。

——本来ならば、気を緩めてしまはずがな。彼は『観測者』にレールから外されてしまったのだ。

六芒星が淡い光を呈し、その周囲に刻まれていた文様が蠢き始める。そして出来上がったのは、巨大な穴だった。下にあるはずの地面はなく、空間を削りとったのだろうか、ブラックホールよりも深淵な闇が、外樹を吸い込んだ。

穴の中は、ねっとりとした闇に包まれていた。自由落下に身を任せて姿勢を変えずに、外樹は下へ下へと行く。術式が発動した瞬間からこうなることは予想していたので、へたに抗うことはしないというのが彼の選択であった。

それが、仇となる。

穴から出た途端に広がった俯瞰は、見慣れたイギリスの景色とは少しだけ違った。と言っても町並みが変わったわけではない。第六感が告げていた。“ここはオマエの知る場所ではない”と——外樹は、もう一度あたりをよく見渡す。

黄金に光り輝くバッキンガム宮殿、派手なロンドンの街並み。それらが一望できる場所にいる彼の真下は、セントジョージ大聖堂があった。

イギリスには、セントジョージ大聖堂と名のつく教会は複数ある。だが、場所的に彼が知っている教会と、その真下の協会は規模が違った。

だんだんと、それが近づいてくる。

その時になって世界最高の魔術師は気づいた。自分は先程から一ミリも動いておらず、術式展開もせずただ落ちているだけだと。

気づいたときには、もう遅かった。

真下の建物の屋根を突き破り、彼はその下にある“何か”の上に落下する。彼はとっさに展開した術式のおかげでその落下する直前までの速度は“ゼロ”にしたが、上から落下する彼の下に来る“何か”は三メートルほど上から落ちてきた人体を受け止めることになるだろう。

「わぷつ！ お、おぼい……」

ばっしゃーん、と水が当たりに撒き散らされる。どうやらここは風呂場なようだった。ということは下に敷かれているものはなんなのだろう、と外樹はいやに冷静な頭で考える。凹凸のあり、声を発する。人のコトバである。

どうやら、溺れているようだ。

外樹自身も当たりに撒き散らされた水のおかげで服がびつちりと張り付いてその細いラインと限りなく女に近い体つきが呈されていたが、それを気にする外樹ではない。取り敢えず下でもがいている女性の上から退き、後頭部を左手で支えて彼は水中から女性を助けます。

「……すまない、ワケありだな。生きているか？」

「……ま、まあ、生きているのでありけるよ。事情は後で聞きたもうぞ」

「ああ、解った。取り敢えず、大丈夫か？」

「大丈夫そうに見えるのであつたらお主は本当の莫迦であろうに」
「違うない」

長い長い金髪は、外樹のそれよりも長いかも知れなかった。整った顔立ちとふくよかな体つきはまごう事無き女性のそれだが、その顔つきを視る限り少女としか思えない。だが外樹は彼女の実年齢を既に見抜いていた。

「……見た目によらず、歳はとっているようだ」
「んにやつ!？」

ものすごく、顔が近い位置で彼らは会話をしていた。唐突の出来事に錯乱状態にあつたからであるうが、彼ら——特に外樹は、彼女が今何をしていたかすっかり忘れており、かくいう彼女も今この体制に疑問を抱く前に情報を引き出すのに必死であつた。

だからこそ、少し落ち着いてきたところでお互いの状況を確認する。

裸。外樹は自分が押しつぶしてしまった女性があられもないかつこつだつたことを再確認し、驚いた。

かくいう女性も、マッパで顔が近い状況を改めて見直し、状況を理解すると顔を真赤にする。

最悪のタイミングで、浴場の扉が開かれた。

「アークビショップ最大主教! あの手帳……は……………」

赤髪の神父が炎剣を右手に構えた状態で現れ、硬直した。それもそつだろつ、自分のよく知る人物——しかも“このような状況”からかけ離れていた女性が、裸で、見も知らぬ男(?)の腕に抱かれているのだから。

何も知らない人物ならば、誤解したとしてもおかしくない。

彼——ステイル「マグヌスは十三歳。思春期真っ只中なのだから。
「すっ……スマン、邪魔をした！」

焦燥などで顔を髪と同色に染め上げて、扉を勢い良く閉める。

気まずい沈黙が外樹と、彼女——ローラ「スチュワートの間に流れた。

「取り敢えず、服を着てくれないか？」

「……脱衣所に置いてあるの」

……どうしよう、と舞月外樹は困り果てた。

取り敢えず彼は彼女にアイコンタクトを交わし、手を離す。ゆっくりとした動作で風呂から出ると、服を脱ぎ始めた。

「えっ」

ローラからしたら今から襲われるのだろうか、と思わざるをえない。背中を向けて服を脱いだ彼は下着姿になり、その下着すらも脱ぐ。裸になった彼の姿は、背中を覆い尽くす銀髪に遮られて見えなかったおかげで、ローラは内心安堵する。

だが、瞬きした刹那。

目の前にいた“彼”は、“彼女”になっていた。
振り向く。

ふくよかな二つの膨らみと、女性らしい丸みのある体型。だからそれでも、引き締まった筋肉は腕やお腹まわりで自己主張していた。
同じ女なのに恥ずかしい、と思いながらローラは自分の腹回りを触る。

「取り敢えず、これなら目の前で着替えても大丈夫だろう」

どこからか取り出した女物の下着を目の前で穿く。どういう神経なのか、ブラはつけなかった。それがローラにとっては違和感を残すことになる。

まごう事無き外樹はローラの目の前で虚空に“緑色のワンピースを生み出した”。それを着てから、外樹はローラを一瞥した。

「……サイズはフリーサイズでよからう」

「いや、というか今一体なにが――」

目の前で虚空が発光し、彼女のためと思われる女物の下着と外樹の物とおそろいのワンピースが生み出されていた。

「これを着てくれ。タオルは君が風呂を上がったら『作る』」

「わ、解った。しばしお待ちになられたもうぞな」

「コホン。……それで、貴方は一体全体何者なの？」

男に“戻った”外樹は、その様子をバッチリ見ていたローラに拷問部屋のような場所の連行された彼は、黒いコートを着ていた。未だ外樹の投影した緑色のワンピースを着ている彼女は、訝しげな心情を包み隠さず表情に表していた。

「さて、まずは自己紹介からいこう。

私は舞月外樹。魔術師でもあり、科学者でもある。経歴その他は省かせてもらうが、恐らく私はこの世界から来たものではない」

「……はい？ ミツキガイキ……聞いたことのない魔術師であってそれに魔法名も持たないとは、また奇怪ぞよ？」

「魔法名とは、何だ」

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。

彼らはお互いの認識の違いを数十分の時をかけて正した。

事情を知ったローラは、深く溜息をつく。

「まさか、そんな複雑な事情があるとは思ってもいなかったわ。……」

…しばらくの間、アナタはここに留まりなさい、面倒程度なら見切れるわ」

英語が話せる相手と解って、ローラは女王英語^{クイーンズ}で話をすすめる。対する外樹も、先程からずっと英語で話していた。もしもこの場に日本人がいたら光速で展開されるネイティブの発音についていけないだろう。

「まあ、私は行くあてもないしな。色々と、世話になるぞ」
二つ返事で外樹は了承する。

固い握手を交わして、彼の“こちら”での生活は始まった。

Second Chapter: First mission

回想を終えた外樹は、小さく嘆息する。ワインを飲み干して彼は静謐な空間を後にする。少し行っただけで出会ったのは、先程の赤髪の神父だった。

「おや、ワインとはいいいご身分だね」

「アルコール類はワイン以外摂らない主義でね」
微笑を交わす。

ローラとの会話が終了した直後、ステイルを含め全員の神父・シスターが大広間に集められ、外樹がここに一時滞在することをローラは話した。その全員に自己紹介をしたため、外樹の顔と名前はこの住人には既知のものとなっている。

とりわけ、金髪ツンツン頭の青年と、この赤髪の神父。白い修道服を着たシスター、また、ポニーテールのグラマラスな少女と彼は仲良くしていた。

「晩餐会まで時間はある。どうする？ 案内しようか」

「君におまかせしよう。出来れば、街を見に行きたい」

肩を並べて歩いていた彼らは、そのままローラの部屋へと向かった。ここを一時的にでも出るということは外出許可を得なければならぬと彼らは考えたからだ。残響する足音をBGMに、彼らは世間話を続けていく。

ステイルは外樹に比べ十センチほどの身長差があるため、自然見下ろす形となる。だが、外樹の醸し出す雰囲気はステイルに見下ろされている錯覚を持たせていた。懐に入ったルーンのカードの数を気付かれないように再確認しながら、彼はローラから告げられるであろう言葉に身構えていた。

三回ノックをする。「入って良いぞ」「失礼」

外樹が部屋に入り、次いでステイルが中に入る。両側の壁は全て本棚になっており、それが魔術読本や魔術書、オリジン 原典であることは人

目でわかる。その中心に配置された机の上には書類の山ができており、そのの一つ一つにローラはサインをしていた。

「外出許可を頂きたい。少し、町並みを見たくてね」

「良いが、オマエにはこれから任務があるぞ」

即答。外樹はローラの言葉を聞いて訝しむ。自分はこの協会の所属ではないはずだ、と反論しようと思ったが、無償で止めさせてくれるはずがない。ギブアンドテイクというものが公平であろうとが一気は考え直し、話を聴くことにした。

「ステイル、外樹は騎士派との共同作戦に参加することになったわ。

“舞月”や神裂も参加しているから、巻き添えは食わないようにね」
「……舞月とは、誰だ」

舞月の名を聞いて眉をひそめるステイルを見、外樹は疑問を呈する。自分の苗字と同じ苗字を持つ人物に興味が生まれたということ。第一だが、ステイルの反応が気になった。それほど、力を持っているのだろうか。

「私たち『イギリス清教』に所属する、最強の『手札』^{ジョーカー}。ミカエル、ルシフェルの相対する魂をその肉体に抱え、ウリエルの力も手に入れている男よ。……まあ、どういう原理かは知らないけれどミカエル、ルシフェル、ウリエルが顕現^{けんげん}している間はその属性の魔術が使えなくなるはずなのに、彼の場合はそれが無いの。

解釈は諸説紛々>>しよせつぶんぶんくあるけれども、おそらく五本指にはいる魔術師であり、異能者よ」

確かに、それでは最強と言われても仕方ないだろうと外樹は考えた。

四天使のうち二体の力を手に入れており、墮天使の王>>ルシフェル<<の力すらも手に入れているとなれば人智を超えた力しか言いようがない。

それでも、外樹はそれにたいして勝利することを確認していた。
(まあ、味方に攻撃するような武器は持ち合わせていないしな。共同任務だとしても、こちらの手札は極力明かすことはしないでおこ

う)

「それで、任務の説明に移ってもいいかしら。外樹は参加することを了承してくれたみたいでもあるし」

「僕もそれについては聞きたかった。いくら騎士派との共同作戦だからといって、神裂までを投入することはないんじゃないか？」

「……敵が敵なのよ。ドイツ聖教の異端部隊『テクノロジ新技術』。基本装備が最新兵器ともなれば、聖人の力の一つも借りなければならんと思つたの。なにせ、騎士派は甲冑を着たナイトさまなんだからな。本場の魔術師がでなければ始まらないの。」

外樹はどうやら、手練者のように思えたのでね。遠距離ならばステイル、お前が十分に役立つ。神裂は聖人で、舞月は切り札。これならば十分に“貸し”を作れるだろう？」

ニタリ、と笑みを浮かべてローラは言う。ステイルは納得したように、テクノロジーについて仔細を尋ねた。

『魔女共』の偵察部隊の情報によると、敵は二百五十名程度の部隊であり、アサルトライフルや軍用ピストルを装備した一般兵が百名ほど、狙撃兵は確認できなかったが、標準装備に加えてロケットランチャーを装備した兵士とショットガンを装備した兵士が合わせて七十五。本陣と思われる場所の周囲は重機関銃で装備した兵士五十名に囲まれていて守られている。

全ての装備に魔術的改造は見られることから、敵は銃に付加させるタイプの魔術を使うようだ。確かに、魔術サイドの『暗黙の了解』に違反していた。

……お飾りかも知れないが、レイピアも装備しているという話に外樹は吹き出していた。最新の銃器で固めているのに、ひとつだけ異質な武器があるところを想像したのだろう。

それに対してなぜ騎士派が、とステイルは思った。彼らは魔術師ではないため、そんなことは関係ないはずである。

「騎士派は、エリザードの命令を聞いているだけなのよ。彼女は私の旧友なの。ま、そんなこともあって騎士派に手柄を持たせて、貸

しを作るのが今回の目的。

でも、任務は“殲滅”よ。作戦決行は今夜。大広間に来ればそこまで案内してくれるそうだから。それまでリラックスしていなさいな。……要件はこれで終わりよ」

「そうか。ありがとう、ローラ。——塵は残したほうが良いか？」

「まあ、リーダー格は生けどり。生きていたらそれでいいから。他は別に消し炭にしても構わないわ」

「ラジャ。それではステイル、案内を頼む」

「あ、ああ……」

これから戦場に行くというのに、外樹は無表情だった。まるで機械のように、無機質な瞳はただ外に出ることだけを望んでいるように見えた。

だが、ステイルに向けられた表情は生氣あふれる若い、中性的な整った顔だった。先程見たのが錯覚なのだろうか？ステイルは首をかしげながら、外樹を先導して部屋を出て行った。

残ったのは、止まることのなかったペンの音とローラだけだった。

街に出た外樹とステイルを待ち受けていたのは、東京に来たのではないかと思わせるほどの雑踏だった。ステイルは勿論日本に行ったことはないものの、トウキョーの雑踏は恐ろしいという警告だけは神裂から受け取っていたためそういうものかと目の前の光景を見て想像する。一方外樹は、長らく自分の住んでいた土地とは違った人々の雑踏に若干圧倒されていた。

日本人などの外来人を含むおよそ数千を越える雑踏を当たり前のよう形成する都市——ロンドン。ステイルはここまで多くの雑踏を目にするのは初めてだった。

圧倒されつつも、観光名所と呼ばれる場所を彼らは歩きまわる。

お昼時になり、外樹が「少し休憩しよう」というまで、焦りと興奮でステイルは自分から歩いていった。

外樹の顔にも、少なくとも疲れの色が見える。今晚は派手なパーティーになることを察したステイルは、これからはもう少し思慮深く行動しようと反省する。

それを感じ取った外樹は、表情には出さなかったがほっとした。本当はまったく疲弊していない彼だが、このペースだと昼食が食べられないと感じ、また今晚に向けて体力を温存しておくためにアノ表情を作ったのである。

ポーカーフエイス、恐るべし。

「取り敢えず、あのお店にでも入ろうか」

ステイルが指さしたのは、“Devils never cly”
という看板のバー風の喫茶店だった。中に入る

と短い銀髪をオールバックにした、青い外套を羽織ったマスターが現れる。

「……注文は」

「ピザをワンホール。チーズはとろっとろに。あとストロベリーパフェ」

「僕は、チーズケーキと珈琲でも頂くよ」

「……オマエは弟に似ているな」

マスターは外樹をみながら微笑むと、厨房へと足を向けた。

淡いシャンデリアの光が薄暗い喫茶店を照らす。外樹たち以外に客はいなかった。壁に立てかけられた日本刀や籠手が異質さを見せていた。ステイルは特に何も思わなかったが、外樹は黙考する。

（……これは、とんでもない人物とめぐり合ったものだ）

とんでもない人物の使ったピザとストロベリーパフェは、とんでもないほどに美味しかった。

口に入れた瞬間に溶けるチーズに、硬いパン生地感触が上手く合わさっている。外樹は十分も欠けずにピザを食べ終わり、パフェへ

と移っていた。対するステイルはゆっくりと珈琲を飲みながら隣に座る中性的な人物を観察する。

自己紹介の時も性別には触れなかったことから、もしかしたら女なのかも知れないという少しの疑念はあった。聞いてはいないが、ステイルはとても興味があった。

その長い銀髪はシャンデリアに照らされてオレンジ色に染め上げられており、どこかピザを食べる時の仕草は妖艶である。それに、見ていて飽きない『綺麗さ』というものを持っていた。観察しながら、ステイルはずっと観察を続ける。

気付ば、外樹は食事を終えていた。見ていて飽きなかったものだから、ステイルは食事を取るのを忘れていた。ステイルの視線に気づいた外樹が、「私の顔になにか付いているか？」と聞いて、ようやくステイルは本来の目的を思い出し、ケーキを食べ始めた。

一足先に『新技術』との戦いを繰り広げていた騎士団長ナイトリーダーほか騎士派の精鋭は、思いの外苦戦していた。前線に出て障害物に隠れながら戦う敵は近づくことなく遠距離からの銃撃を繰り返している。騎士派にも遠距離攻撃の魔術はあるが、それを発動しようとした矢先に狙撃が来る。

大砲が来ていないだけまだマシだった。

騎士団長は歯噛みする。着々と敵の部隊は減らせているものの想定以上にこちらの損害が大きすぎる。自分の後方には何十もの骸が転がっていた。

二百に満たない部隊で敵に攻撃を仕掛けたのが間違いだったかも知れない、と騎士団長母神する。味方の増援が来るまで撤退するか、と彼は考えたが――

（否。騎士の道に後退の二文字は存在しない）

銃弾を弾き、一気に距離を詰めて騎士団長は敵の兵士の首を飛ば

す。回転し、真後ろからこちらを狙っていた凶弾を斬り、——その射手を斬る。さらにその後方にいた敵を天罰の雷を応用した雷を飛ばし、焼き滅ぼす。

騎士派の精鋭たちも己が剣で敵を斬り、斬り、斬り、斬り、斬り、斬り、斬り、——既に敵の損害は騎士派を上回っていた。だが、前に進めば進むほど敵の銃弾は数を増やし、それと同じく鋼鉄^{はがね}のぶつかり合う音は増える。接近戦になると敵も剣を抜き、騎士として、剣士として戦う。

そこには誇りはあり、人道は存在した。——だが、それをも無視して決闘に割り込みをかけ、敵の狙撃兵が騎士を撃ちぬく。神の加護もあり、魔術的加工もされた甲冑に身を包んだ彼らに銃弾が効くはずもないが、衝撃は残る。蓄積されていくダメージが遠くからの流れ弾を受け、鎧の内側から鮮血を散らすのは少なくはなかった。

血沸き肉踊る戦い。そして、誇りも尊厳も捨て去った戦いが始まるのはその二時間後だった。

Second Chapter: First mission (後書き)

最近感想がなくて若干さみしいです。

音楽でモチベ維持していても、……やっぱり感想があつたほうが、
一気にモチベ上がるなあ。

欲丸出しで言いますが、批評でもいいです。感想をください。そう
してくれると嬉しいな

転移魔術の陣の中で、ステイル「マグヌスはふらりと消え去った舞月外樹の存在を気にかけていた。座標さえわかればいつでも行けるというものの、行って何になるというのだろうか。こちらの最高戦力を投入するような事態だというのに、いったい『部外者』の彼は何を考えているのだ。

理解しがたい。ステイルは頭をかかえる。

「作戦開始まで、残り十五分だ。せいぜい気張れよ、お前たち」
最大主教が顔を出す。いつもと変わり用のない呑気な顔は、どこか朗らかだった。何かいい
ことでもあったのだろうか。

「最大主教、外樹がどこに居るかを知らないか？」

「彼なら私に戦地の座標を聞いてから、どこかへ消えてしまったわよ。もしかしたら、独自の

移動術で戦地に到着しているのかもしれない」と、冗談めかして彼女は言う。

それが冗談に聞こえなかったのは、ステイルだけだったろう。

だが彼らは知らない。

彼らが戦地へ行ったときには、もう既に『終わっている』ことに。

■

「術式転移。簡易転移使用。座標a o r e a a g I pに設定。O a t r e p t eを通し、顕現する」

短く告げる。煌々と月光が降る中、彼はひとつの決意を固めていた。

一つの戦を終わらせ、イギリス清教に、イギリスという国家そのものに『恩を売る』。それが

彼の狙いだった。聞いた話によると、イギリス側は存外苦戦しているようだった。それならば圧倒的な『力』で味方に損害を与えずに、敵を殲滅すればよい。

この世界の魔術師は、そんな術式を持ち得ない。持っていたとしても、莫大な魔力によってスタミナ切れになるレベルのものだろう。だが、舞月外樹ならできる。

瞬きのうちに、彼は転移した。眼下で繰り広げられる戦い。炎や雷が飛び交い、鋼鉄がぶつかり合う。その戦場から遠く離れたところでも、小さな火が噴きだされ、音速を超えた弾丸が打ち出される。戦場。

彼がなんども経験したこの感覚。彼はそれを感じ取りながら、戦場の解析を始めた。イギリス式の魔術はステイルに頼み込んで一度見せてもらった。

一度見れば、覚える。彼はイギリス式の魔術の特徴を既に掴んでいた。それを解析し——それが一番大きな『駒』を見つける。

一瞬で、彼はその隣へと移動した。

戦火の中心。イギリス騎士然とした男は、鎧甲冑を身に纏わず、真っ黒な紳士服に身を包んでいた。突然現れた外樹に対してその騎士は驚き、外樹へと一瞥をよこす。外樹が黒い粒子を集め、右手に刃を作った瞬間彼は舌打ちし、防御体勢へと移行する。

外樹が手に持つ刃を振り下ろす。

その男を狙っていた狙撃兵を、二キロ先に居ながら外樹は切り裂いた。そして、飛んでくる弾丸も真つ二つにし、その男にぶつかる直前で二又に分かれ、彼らを囲む敵へとそれが当たる。

「お前、は……」

「舞月外樹。イギリス清教に厄介になっている『客』だ」

「ローラ」スチュワートから話は聞いている。私はリイヴェンシ

ユタイン。肩書きは騎士団長だ。——それで、君の要件は何だ」

彼らは舞い、踊る。周囲を囲む敵を斬り、斬り、斬り、斬り、斬り、斬り——打ち込まれる魔弾をもまとめて、全てを斬り刻む。それは一種の芸術と言っても良い。赤色の液体を浴びながら、彼らは進む。

「私はこれより敵本陣を叩く。その後、残存勢力を『殲滅』する。ヘタに巻き込まれないように全軍に注意してもらいたい」

「ハッ、言ってくれるな。我らは英国の騎士だ。その誇りにかけて我らは血を流す。下手な流れ弾を喰らうほど我らは甘くない」

「そうか。……ならば、遠慮しないでいいな？」

笑みを浮かべる。外樹は、黒い粒子を集め——自分の周囲に矢を創りだした。その数は数えきれず、空を覆えるのではないかと思える。そして、光を拒絶する『黒』。

「放つ。矢尻が中るのは我らの敵。彼らは疾く、抵抗するまもなくその心の臓を撃ちぬかれるだろう」

瞬間、空間を黒が覆った。音速を優に超え、射出された数秒後に爆音が響く。幾万の矢尻は一瞬で敵の心臓を穿ち、鮮血を散らす。瞬きのうちに、戦場は塗り替えられた。残存戦力はイギリス側が圧倒的に多く、彼らは殲滅すべき敵を探して、自然と——敵の本陣へと移動する。

「……………」

その様子を、騎士団長は見せつけられた。真横で、『最強』の片鱗を。すでに自分たちの出る

幕ではないと、それだけで自覚した。

逆に、邪魔になるだろう。

「外樹、行け。——君に任せよう」

「妥協してくれて感謝する。それでは、また会おう」
そう言って、外樹は姿を消した。

騎士団長は外樹の居た場所を、じっと、見ていた。

彼の周囲は、無数の敵の屍に囲まれていた。それは、戦火が激しかったことをまざまざと物語っていた。

それでも——『最強』は、一瞬で激戦を虐殺へと塗り替えた。

□

ドイツ聖教の『新技術』の本陣は困惑に包まれていた。

一瞬で、漆黒の矢尻に前線に出ていた狙撃兵・歩兵が殲滅されたからだ。この戦場全体に探索の魔術を張っている彼らは生命反応が一瞬にして消え去ったことをすぐに知った。

そして、その強大な魔力を隠すつもりもなく堂々と溢れさせながら、殺戮を引き起こした『何か』がみるみるうちに十キロという距離をつめている。

本陣への到着まで、残り五秒。

信じられなかった。

たった一人の手によって戦況が全て塗り替えられるということがドイツ製の最新兵器に魔術的改造を施した彼らの技術は並のものではない。射程、威力、貫通力……全てにおいて人造兵器の“限界”を超えたモノを作り出したのだ。だからこそ、イギリス最強の騎士団『ゼロ』が来ても、勝算はあると踏んだ。

いつたい、どんな力を持つ敵なのだろうか。

それにたいして彼らは興味を抱くと同時に、拭えない恐怖を抱いた。

□

高速で移動していた外樹は、本陣が見えだしたところで急減速し、そのまま右へ跳んだ。

その瞬間、先程まで彼がいたところを銃弾の嵐が襲う。外樹を追うようにして、弾丸は右へ右へと移動する。

地面に突き刺さった弾丸以外は、全て外樹を追尾する魔弾だ。

それを、黒の刃の一振りでは彼は全て消し飛ばす。

弾丸は数百メートル先から打ち出された。本陣の前に重機関銃を構えている男達が外樹の視界に入る。彼は弾丸を全て躲しつつ、黒の粒子——『壊』因子を操作していき、刃の状態から、どんなものでも貫くことの出来ない『膜』を貼る。

「操作。絶対防御、自動攻撃。我が敵を塵殺せよ」

粒子が外樹を中心とした球を作る。それは宙に浮かび、ゆっくりと上昇を続ける。

——そして、その球から無数の触手が飛び出した。

魔手は伸びる。球に向かって何百もの弾丸が突き刺さるが、それは決定打を与えることは出来ない。肉薄する職種を切り落とそうと腰の銃剣を振り抜く。

だが、弾かれ——彼らの心臓が抉り取られる。そして、心臓を無くした死体へと魔手が伸び、体中の穴から体内へと入り、犯す。

みるみるうちにそれは肉塊へと化し、生命力を全て奪い取られた時点で——塵に帰る。

A s h t o a s h . D u s t t o d u s t .

全てを塵へと返すその魔手は、大地を、ヒトを、尊厳を——全て、陵辱する。

すべての生命を喰らい尽くしたと判断したその触手は、新たな生命反応を感知してそちらへと伸びる。

ひとつの生命。人間の魂を喰らったそれは、肉食獣と代わりはなかった。

外樹は、動くことをせず……全ての生物を“捕食する側”としてそこに佇んでいた。

□

「な——…これは、は」

地獄絵図だった。イギリスの騎士派の損害はゼロ。それに対し、『新技術』は全滅。そして、死体は黒い触手に犯されていた。原型を留めず、ただの肉塊へと化しているものもあれば人の形をした灰がある場合も。

ステイルは絶句した。これを、” たった一人で行った ” 外樹の精神の異常さに。

「生命反応はもうない。敵の魂から情報をダウンロードしているから、他の後続部隊もないことが解った。

これで、いいだろう?」

「あ、ああ。いいには、いいが——」

いくらなんでもこれはやり過ぎじゃあないのか。

「異端者はヒトではない。ただの敵だ」

「ッ——!!」

「よせ、ステイル」マグヌス。彼はやるべき事をやった。それだけで十分だ。

感謝するぞ、外樹」

「礼には及ばんよ、シュタイン」

弱冠十三才のステイルには、人の尊厳も何も無いこの有様が、信じられなかった。そして、これを見ても顔色ひとつ変えないこの二人に、一種の畏れを覚えた。まるで、こうなるのが当たり前だったといわんばかりに、彼らは武功を立てたことについて笑い合っている。

（まったく、理解出来ない——）

ステイルは心のなかでぼやく。

「まあ、私は先に帰るぞ。シュタイン、また会おう」

「ああ。君とは一度手合わせ願いたいな」

「光栄だな。フェアな決闘を約束しよう」

笑みを浮かべて、外樹は姿を消した。

一瞬黄金の翼が見えた気がしたが——気のせいだったのだろうか。

ステイルは一人首をかしげた。

Third Chapter: Krieg & t.戦争 & t. & t.; (後

スランプ入ったかも……

行間

観測者は全てを観察していた。

——だめだ。このままならば“私”は絶望を視る。

そうなれば彼が別の形で同じ観測者となることは必至。観測者は——舞月外樹に観測者としての道を歩んでほしくなかった。

たとえ強大な力を入れることができるとしても、たとえ、世界のすべてを知ることが出来たとしても。

ファウスト的衝動に身を任せたものの行く末は、ニンゲンとしての死。

かつてはヒトを愛し、仲間と笑いあった観測者は——世界の鎖につながれている。そしてその呪縛は、永久に消え去ることはない。彼が観測してきた“自分”は、どれも自分と同じように生まれ、生き——同じところにたどり着き、ヒトとして死、『観測者』として生きる。いくら観測者が妨害しようとしても、それはどうにもならなかった。……最初で最後のチャンスかも知れない、と観測者は考える。

彼が思いついた“修正”の方法はとても強引なものだ。成功する確率もとても低い。

希望が“死ぬ”か、“生き延びる”か。これは彼に取って賭けだった。

最初で最後の。そして、最高の。

「術式展開。術式名『次元移動』。Finishの言葉と共に帰還術式発動。——工程終了。これより起動する」

観測者は、全身全霊をかけて舞月外樹を“殺し”に行く。

観測者と遭遇するまでに、舞月外樹が『絆』を持つことが出来なければ。
彼は、そこで……

Fourth Chapter：本当の”戦闘” 前

舞月外樹はドイツからの帰還を果たす——はずだった。

「君が『イレギュラー』か。……確かに、先程の戦闘をみる限り異常だな」

目の前に居る、この男は何だ？

自分が立つ、この空虚な、生命を感じられないこの世界は何だ——？

「どうやら理解が追いついていないようだな、カリア＝フリード」

「……！ 何故、その名前を知っている？」

彼がこの世界に来たのは数日前だ。その間、何か身边を調べられた形跡もなく、別段こちらが口を滑らせたわけでもない。

では、何故——

この男は、自分の『捨てた』名前を知っているのだろうか。

「状況がいまいちわかってないのか。お前、オレに見覚えはないのか？ ローラから説明は……うけてないだろうな」

黒髪の青年は、小さく溜息をつく。腰に差してある日本刀は、空間を拒絶するように漆黒に染まっていた。鞘は漆塗りで、柄は材質が解らない。そもそも、あの色を取る材質は”存在しない”。

思考停止していた外樹は、その青年の言葉で全てを理解した。

「舞月作玖。一度、お相手願おうか」

この男は、自分と戦^{オレ}いたいのだ——

外樹の後方が、歪む。その中から漆黒の粒子が滝のように溢れ出し、一つの刀を創り上げた。宙空にとどまるその柄を手に持ち、正眼に構える。

「決闘がしたいなら初めから言えばいいものを——わざわざヒトサ

マの術式に割り込むような無礼者には、これで十分だ」

「ほざけ。——行くぞ、『^{イレギュラー}異端』。神の使いによる裁判だ」

刀を抜き、作玖は地を蹴った。

その瞬間、世界が色を持ち始める。

空には朧月がぼんやりと佇んでいる。風一つなく、どこまでも続く草原に、二人は立っていた。

——気味が悪い。

神が作ったものが、云い知れぬ醜さを呈するはずがない。外樹はゆつくりと迫る作玖を見ながら思った。

——作玖が遅いのではない。

外樹が、速過ぎるだけだった。直線的すぎた動きは外樹が体を反らすだけで回避される。振り向きざまに振るわれる一閃を刀の腹を擦り合わせるようにして受け、軌道を逸らす。そして、刃を振り下ろした。

作玖は手を引いて、自分の最高速度でそれを防御する。

また、刃が弾かれた。

そして、その時から目指することもままならないぶつかり合いが繰り広げられる。

力任せの黒と、徹底的な『技術』の黒。

優勢なのは、外樹だった。すべてを受け、反撃の隙を見せた瞬間に拳を繰り出す。それを防御したとしても——二つ、三つと外樹の体術が展開される。いつの間にか刃と刃のぶつかり合いに、肉体も混ざりつつ在った。

だが、攻撃に混ぜることが出来たのは外樹のみ。

伽藍堂の世界に鋼鉄のぶつかり合う音と、拳が肉に叩き込まれる音が響く。

——なんで、一撃も入れられない！？

先程から、作玖はミカエルとルシフェルの力をフルに活用している。肉体の速度を上げ、一撃一撃の威力も上げ——

だが、『技術』だけは——それだけは超えることが出来なかった。

見た目は作玖より少し上だろう。二十代前半の風貌をしている。だがその圧倒的な経験に裏打ちされた直感と、戦闘技術を外樹は持っている。外樹よりも幾つも若い作玖は、それを見抜いた。

見抜いたから、行動を変える。敵と戦うのではなく、『殺す』方向性へ変える。恐らくこの男は自分が殺した程度では死なない。

作玖は振り下ろされた外樹の刃を勢い良く弾き、隙を見て後方へと跳ぶ。

「ミカエル、ルシフェル、我が名の下に太陽の輝きを取り戻しその威光を示せ……！」

瞬間、シャツの右袖がはじけ飛び、晒された腕はその手に持つ刀——黒天邪刀という、魔の力を封じ込めたもの——とは対照的に、太陽のように光り輝いていた。そしてそれが灼熱を取り戻すと同時に、肩甲骨の間辺りから鴉からすのような翼が飛び出す。肉体の内側に収納していたものを表に出す、グロテスクな音が響く。

生命を持ったものとして脈打つその翼はどこか力なく垂れ下がっているようにも見えた。

輝く右腕から逃がすように、作玖は刀を左手に持ち替える。

「最強の堕天使と、天の使いの王か——面白い、ならばその骨の髄まで、喰らいつくすことをここに契約しよう」

にたり、と外樹は嗤わらう。
手に持っていた刃は霧散し、元の姿へと戻る。それは外樹の体の中に取り込まれる。

「我が両手に在るモノは、かつて神に引導を渡した唯一無二の武器。我が両手に在るモノは、かつて魔王を地獄へと引きずり込んだ唯一無二の武器」

空間がねじれ曲がる。巨大な魔力を備えたその二つの武器は混ざり合い、——一對の、歪な形の『武器』となった。

唯一無二の、誰にも模倣できない神殺しの双刀と拳銃。それは互いに絡みあい、刃と銃をちゃんぽんにしたような形をした武器となった。

グリップ

柄は拳銃のそのの形をなし、そこから伸びるものは飾り気の無い砲身。

外樹はそれを見て、振る。

空間が割れ、割れ目から真っ黒な何か（・）が飛び出した。次元断層の残骸である。

見れば、外樹の持っていた武器の砲身は日本刀のそれへと変わっていた。

「——いこうか、天の者」

「人間風情が。『我ら』を殺せるとは思っなよ」

彼らは、ぶつかり合った。

Fourth Chapter：本当の”戦闘” 後

火花が散る。空間に罅が入る。刃の速度は落ちることなく、右腕と、真つ黒な剣と舞い踊る。そのステップはだんだんと勢いを増している。外樹の突きを右腕で止め、作玖は黒天邪刀を振りかざす。

だが、外樹の反対側の手に握られている剣はライフルへと姿を変え、零距离からの射撃を行う。打ち出された凶弾は作玖の刀に真つ二つにされた。

その瞬間に、振り下ろした左手を外樹が蹴り、その反動で後方へ跳ぶ。空中で一回転し、両手で武器を構える。

それは、黒と白の拳銃に姿を変えていた。19mmオーバーの弾丸が連続で射出される。作玖はそれを避けようとはせず、右腕を振りかぶった。

「オオッ！」

叫び、正拳突きを繰り出す。すると右腕から極太の光線が飛び出し、弾丸を消し飛ばした。射線に入っていた外樹は両の刃でそれを断つ（、、）。四つ又へと変わったその光線は周囲へ散り、草原に小さなクレーターや爪痕をつける。

外樹が地面に降り立つのと、作玖が彼に肉薄するのは同時だった。外樹が降り立つ直前に跳び、飛び蹴りを放つ。彼の着地点に立つ外樹は上体を反らすことでそれを避け、から空きの背中に斬りかかる。だが、背中の翼が刃を止めた。ガチガチ、と鏝迫り合いが起こる。ふつ、と翼が消えた。消えたというよりは、作玖が百八十度回転して一歩下がっただけなのだが、いきなりぶつかり合っていた『モノ』が消え、彼は前のめりに倒れそうになる。

「もらったア！」

作玖は笑みを浮かべ、拳を振りかざす。そして、迷いもなく突き出した。

——甘いな。

小さく外樹が呟いたときには、既に右腕から先は”消失”していた。刃についた血を払うために外樹は右手に握られている真っ黒な刃を振るう。

「神殺しの魔刀。天使でさえその効果には抗えんさ」

そして、左手の真っ白な剣で作玖の刀を『斬り飛ばす』。刀身が消失したその刀を握る左手を蹴り飛ばし、そして外樹はその脚をそのままフツクの軌道へと変え、作玖の横っ腹を蹴り飛ばす。

「だいたいあんな状況から大勢を立て直せなはずがないだろうが、阿呆。お前がイギリス清教の人間かどうかは知らんが、オレを殺そうとした時点でお前の運命は確定したようなものだ」

外樹はそう吐き捨てる。その両刃は鮮血に濡れていた。ぼうぼうに伸びた草の海に沈む作玖を見て、外樹は言う。

「人間を侮るなよ、人外」

「じゃあ、人外とも人間とも取れないオレはどうなんだろうな」

気づけば、外樹の後ろに男が立っていた。金髪に緑眼、あまりセンスの良くない格好をしているその男は、武器を持っていなかった。それ以前に、外樹は疑問を抱いた。

—— いったい、この世界にどうやって入り込んだ？

—— もしかして、この男は作玖の味方なのだろうか。

「オレの名はオッレルス。—— 魔神になりそこねた男だよ」

「……魔神？」

魔を統べる神に成り損ねた。それにしては魔力の量が少なすぎる、と外樹は思った。おつれるスト名乗った男は両手をポケットの中に突っ込んだまま佇んでいる。

何をするまでもなく。

作玖を助けるわけでもなく。

「しかし、義理の息子を探しに来たらこんなことになっていた。

大方ガキの方からアンタに手を出したんだろうが……過剰防衛じゃないか？ 右腕を切り落とし、剣を破壊するってーのは……」

「ヒトを殺そうとしたんだ。命を取っていないだけ良しとしてもらいたいがね」

微笑しながら外樹は言う。その間中、外樹は唐突に現れたこの男の目的を探っていた。目的は義理の息子を探していると言っていたが、恐らく建前だろう。そうでなければ、ここまで大きな殺気を塊にしてぶつけてくるはずがない。

それとも、息子を殺されかけたときの激情なのだろうか、と妻を失ったときの自分を思い出しながら外樹は苦笑する。

「それで？」

「……取り敢えず、刃を収めてくれないか？ 話ができない」

「無理だな。ならば君は殺気を抑えたまえ」

それも無理な相談だ、とオッレルスはいった。仕方ないな、と外樹は言った。

「……っそ、オッレルス、何しにきやがった」

と、作玖が苦しげに言い放った。先ほど切り落とされた右腕は既に修復されていたが人体のそれに戻っている。また、背中から飛び出していたあの翼は既に消え去っており、変わっていないのは折られた刀だけだった。

「回収だ」とオッレルスは作玖の質問に答えた。「おまえじゃなくて、こっちのね。どうやらこの……外樹だっけ？ がローマ正教に敵視され始めたらしく、イギリス清教のローラからオレのほうに依頼が来た。報酬も良かったし、なによりシルビアに行行って言われたら行かないわけにや行かない。」

だから、ガキ。……お前がオレの邪魔をするんなら問答無用で倒すさ」

そこまで言われれば仕方が無い、と作玖は諦めたようだ。黙って

降参のポーズをとっていた。自分の見知らぬところでドンドンと話が進んでいき、外樹は困惑する。

「……というわけで、一緒に来てもらうよ？ 外樹君とやら」

「え、あ、……ああ、付いていけばいいんだな？」

未だ事態を飲み込めていない様子で、外樹は返事をした。

『新技術』設定考察

ドイツ聖教で名称は決定でいいかと。せいきょうのよみにこだわる必要ないけど、神聖だって自分から言い張っているところをイメージさせたい。

魔術サイドではドイツが本場で、ドイツが一番摩訶不思議スコシフシギな術式を作ることでも有名。今回相手をするのは科学技術を魔術に持ち込んだからで、それが”協定違反”だとかどうか。それが許せないということでイギリス清教が動くカタチで。ローマ正教も同時期に動き出しているが、あくまで法王庁はドイツ聖教のトップと話を付ける形で交渉しているだけ。

科学技術を持ち込んだ『異端』グループの名前は、『新技術』>>テクノロジー<<』って自称している方向性で以下と思われ。勿論ドイツ側は知ってて放置中。

『新技術』は化学反応式を応用した魔術を使う。また、銃器もじゃんじゃん使っちゃう系。外樹と作玖大活躍。すていきゅんいのけんでめっさつだね！

取り敢えず『新技術』の使う魔術や、グループの規模について

グループの規模は200名程度。基本装備は軍用ピストル、アサルトライフル（グレネードランチャー装備）。部隊によってはショットガンやロケランかな？下にも書いてる。

一応二百五十名居るとして、ピストルとアサルトライフルは百名に支給。ショットガン兵は五十名、ロケランは二十五名。狙撃兵が二十五ときて重装備が残り五十かな？

レーザーポインタ、手榴弾は基本。コンバットナイフの代わりにレイピア装備。

ピストルはワルサー P P S。装弾数は八発。魔術的改造を施されていてモード切り替えによって追尾弾の発射が可能。それでも装弾数は変わらず。

アサルトライフルは H & a m p ; K X M 2 9。装弾数は三十発で、二十ミリグレネードランチャーは六発装備。魔術的改造を施されており、また通常改造も施されている。そのため装弾数が五十発となり、グレネードランチャーは装弾数八発となっている。また、この八発のうち二発は魔術的物質によって構成されたものであり、一つは周囲に衝撃波を撒き散らす炸裂型、もう一発は煙幕用に近い。

ショットガンとアサルトライフルどちらも支給されている兵が五十名ということで、実質斥候役。戦場では前線に出される役目。彼らはレイピアを装備していない。

ショットガンはベネリ / H & a m p ; K M 4 スーパー 9 0。装弾数六発で、一度に発射される玉数は三百発。有効射程は五十メートル、威力は五十メートル先から打って腕が吹き飛ぶ程度。魔術的改造のおかげである。

最大射程が三百メートル。足や腕を吹き飛ばしてからヘッドショットや心臓を撃ちぬくために使われる。狙撃兵にもショットガンが装備されている。

狙撃兵に支給されているショットガンはオリジナル。テクノ X 2 0 0 と銘打たれたそれは、魔力によって稼働する。装弾数は魔力が尽きるまで。狙撃銃も同じくオリジナル。テクノ X 2 3 0 と銘打たれている。同じく魔力によって稼働する。

テクノ X 2 0 0 は . 4 0 8 チェイタックをベースに作られている。有効射程は 7 5 0 m。命中精度はほぼ百発百中。秒速五百メートル

オーバー。エネルギー弾なので放物線を描かない。ただ、どれほど優れた魔術師でも十発も打てないほど魔力消費が著しく、多用はできない。

テクノX230のほうは200と違いマナとオドを混合させて弾丸を作るコンバータがついている。そのため魔力消費は少ないが、射程が五十メートル以下とカスい。威力は五十メートル先から撃ちこんで腹部が傷だらけになる程度。致死傷である。敵の体内に入った瞬間に実弾と同じ鉛に鍊金されるため、非常に質^{タチ}が悪い。

『新技術』の魔術は前述を見れば解るとおり、銃に付加させる魔術が基本である。ルーンなどいろいろな魔術を取り込んでいるために、上手くミックスするのがコツ。リーダー格は生け捕りとの命令。

『新技術』設定考察（後書き）

ちよつと公開してみた裏設定。

Fifth Chapter: 観測者（前書き）

Observer has come .

The time is over .

Fifth Chapter: 観測者

いつたい、いつになったら彼は自分の思ったとおりの働きを見せてくれるようになるのだろうか。彼は私であるはずなのに、すべてを失った経験が歩かないかだけで、ここまで嗜好は違うのか。戦争を楽しむ暇があるのなら、人間として真に必要なことをすれば良い。それが解らないというなら、切り捨てるしかない。

自分に対する裁き。そう——裁きだ。

かつて全てを失った私は、すべての世界に存在する私を裁く権利がある。

オッレルスが向かった先にあつたのは、それなりに大きな住居だった。大人が二十人暮らしても余りそうな、そんな部屋数を持つているのだらう。だが、ただ『住む』だけならその程度の広さの住居はありふれている。外樹の見限り、それらに比べて、美しい装飾などで彩られた赤レンガの家はよほど高価なものに見えた。

（没落した貴族か？）

恐らくそうであろう、と彼の経験が告げる。彼の知人にも没落貴族は少なくないが、皆このような、『一般住居よりかは美しいが、今も尚続く名家に比べれば明らかに見劣りする』という家の性質をもっていた。

「シルビア、帰ったぞ」

「遅い！ 以来はスピード勝負だと何度言ったらわかるんだい！？ 案外報酬が変化したりするんだよ？」

「ああ、ああ解っているから鞭メイダみたいなの『ナニカ』はやめて！」

オッレルスを出迎えたのは、侍従メイドさんみたいな格好をして、その右手に鞭の形状をした黒い塊を握っている女性だった。彼女は外樹に目もくれずにオッレルスの耳たぶを引っ張り、その耳元で、わざわざ大声を出して説教を始めた。

わせていた女性だった。彼は驚いて一步後ずさりし、「あ、ああ。大丈夫だ」としどろもどろに答えた。

だが、外樹の額には脂汗が浮いており、顔面蒼白だった。オッレルスもシルビアもその様子には気がついており、彼を早めに部屋に案内し、三十分ほど時間を空けから、これからの説明をすることにした。

女性——シルビアが外樹のために用意した部屋は八畳ほどの和室だった。洋風建築の中にどうして和室があるのか、と外樹は疑問に思ったが、なんでも「持ち主が日本びいき」だかららしい。

持ち主に一度会ってみたいな、と感想を抱いた彼は、もらった三十分を睡眠に使うことに決定した。ふかふかのベッドに飛び込んだ彼は、重い瞼をゆっくりと閉じた。

「まったく、よく眠るね」

外樹が眠りにつくまでを見届けてから、オッレルスは小さく溜息をついた。彼の後ろに立つシルビアも同じような動作をしている。

ローラ「スチュアート直々に勅命が下ったと思えば、謎の男の保護ときた。こんな人間に街ひとつ買い取れる金をどうして積もうと思ったのか……シルビアにはそれが謎だった。

思えば、初めからオッレルスはこの男と接触することを嫌がっていた、とシルビアは思い出す。一体なぜ、オッレルスは見も知らぬ男との接触をあそこまで拒んだのだろうか。彼の反応を思い出しながら、シルビアは外樹の寝顔を眺めていた。

「なあ、シルビア」

急に、真面目くさった顔つきでオッレルスは話を切り出した。なんだい？ とシルビアは視線をオッレルスに向けて返事をする。

「今からでも遅くない。早く、アイツから離れよう」

「なんでさ。困っている人間を助けるのアンタの性分じゃなかった

のかい？」

私はそんなアンタに惚れたっていうのに、という言葉を飲み込んでシルビアは答える。そう、この任務を受ける前からオッレルスの様子はおかしかった。なぜ、舞月外樹という人物との接触を拒むのか――

「観測者だ」

「……なんだって？」

「こいつの正体だよ。魔神の『座』の管理者とも言われている。オレは一度、あそこにたどり着いたからよくわかる。コイツだ、コイツが管理者なんだ。だけどオレの見たのとは違う。恐らくこいつの末路だ。だから、ソイツがコイツを潰しに来るまで――」

「待った、待った」

今まで見たことのないような、焦りを浮かべた表情でオッレルスはまくしたてていた。初めて見せるオッレルスの様相に、シルビアは困惑する。はつきり言って、彼女の理解は追いついていない。「一体なんの話なんだ。なんでいきなり魔神の『座』が出てくる」
「いいから、話は後だ――」

オッレルスはシルビアの手首を掴んで、この住居の出口へと向かうとする。シルビアは抵抗しようとしたが、聖人の彼女が痛いと思うほど、彼の手を握る力は強かった。が、そんなオッレルスがピタリと、足を止めた。

気づけば、音は消えていた。鮮烈な殺気だけが、周囲を包んでいた。

「――オラザーバー観測者……ッ」

オッレルスは歯噛みする。奥歯を食いしばり、あきらめにも近い表情を見せていた。

「――オッレルス、舞月外樹はどこか、言え」

「そこに――」「アンタに教える口はないね」

出口を塞ぐように立つ、観測者に向かってシルビアは言い放つ。
オッレルスの手を振り払い、シルビアは観測者に向かって一歩踏み出し、自らの影に手を伸ばす。

観測者は、無表情だった。機械のような冷たい瞳で、もう一度繰り返す。

「舞月外樹は、どこだ」

「アンタに教える口はないって言うてんだよ！」

「やめろ、シルビアッ！！」

既に、遅かった。

Fifth Chapter: 観測者（後書き）

久々の投稿で超展開なのです。次回からは漸く「観測者編」なのです。

S i x t h C h a p t e r : 静かな激突

影の中から、全長五メートルほどの大剣——クレイモアを引き抜いた彼女の右腕は、断ち切られていた。その切断面はとても綺麗で、神経や血管に傷ひとつつけてはいなかった。だから、彼女は腕が斬られたことに気づくことすら出来なかった。

「——え？」

喪失に気づいたのは、腕を振り切ったと思ってから。何時まで経ってもクレイモアが動かないことに疑問を持った彼女は視線をゆくりと右側に向けることで、ようやく右腕を失ったことに気がついた。

「舞月外樹は、どこだ」

観測者は、冷たい瞳で言う。

その右手から先に、紅色が付着していた。

「あ、あああああああつ！？」

返答は、悲鳴。あまりにもきれいな切断面のせいで、血を止める障害物のない血管から、血が一気に吹き出す。鮮血を周囲にまき散らしながら、彼女はどうすることも出来ずに屍餅をつき、ヒステリックに悲鳴を上げていた。

「シルビアッ、おい、しっかりしろ！　ちくしょう、だからやめろと——！」

駆け寄ってから、オッレルスは何度もシルビアに呼びかける。だがそのヒステリーは止まらず、何時まで経っても血は止まらず、シルビアの顔からは生気が失われていく。

どうすることもできないのか、とオッレルスは歯噛みする。この女に愛しているという暇もないのか。

「舞月外樹は、どこだ」

「——その部屋で眠っている。なあ、頼む。コイツを、シルビアを助けてくれ！」

「その女は、オレの障害となった。破壊した障害を修復するという無駄なことをオレはしない」

冷たく言い放ち、観測者は彼らの横を通りすぎた。

「クソがッ、この——外道め！」

なんと罵倒すればいいのか、オツレルスには解らない。ヒステリックに悲鳴を上げ続けるシルビアよりもヒステリックに、彼は罵詈雑言をまき散らした。

「外道で結構。もとより人の道は外れている」

観測者は、そう言い放ち、部屋の扉を蹴り飛ばした。

だが、中には誰もいない。おかしい、と思つて観測者は首をかしげ――

その細い体は、壁にたたきつけられた。壁を突き破り、その隣の部屋にまで吹き飛ばされる“観測者”。その表情は伺えないが、ダメージは欠片も見えなかった。

吹き飛ばした人物は、舞月外樹。

「……くそ、まったくもって不快だ。何故オレがオレに狙われなければならん」

「貴様は私と同じ末路を辿ることが観測できたのだな。同じように、オレは貴様という存在を何度も消してきた。それと同じことを、今回もしようとしているだけだがね」

観測者は――外樹と全く変わらない表情で、言う。同一人物である彼らの違いは、なかった。違ふとしたら、まどつている雰囲気だけだろう。

「まあいい。チャンスをやろう」

「チャンス？」

観測者は言う。それは貴様が私と同じ末路を辿るか否かを決める

「試練」だと。

「自害しろ」

観測者は、機械のような声で吐き捨てた。

「オレは貴様という人間を見るのが不愉快だ。裁きを行おうと意気込んできたものの、そんなに腑抜けたならばオレが殺す必要もない疾く、逝け。お前の未来は既に観測済みだ。貴様もそれを見ているだろう？」

それならば、貴様の障害が無意味だということも解るはずだ」

嘲るように、観測者は言う。

罵るように、観測者は言う。

憐れむように——観測者は、言ったのだ。

舞月外樹に向かって、死ね、と。

「断る。オレは未だ世界を見きれていないんだ」

「観測の絶対性を貴様は知っているだろう？」

「ああ、だがそれよりも——オレは、世界を見たい。そしてそれ以上に、いまそこで右腕を失った女を助けてやりたいんだ」

そう言つて、外樹は長袖のシャツから、キラキラと光る『糸』を射出した。そして、それを操ってシルビアの右腕の縫合を始める。生憎と、彼はこの方法しか知らなかった。もう少し距離を近づけたいが、ここで背中を見せたら斬られる可能性があることを彼は承知していた。

だから、右腕の縫合を終了させるまで、気が抜けなかった。だが観測者は彼に襲いかかることはせず、そのさまを、じっと見ていた。

縫合が終わる。安堵の溜息をついて、外樹は糸を切った。

S i x t h C h a p t e r : 静かな激突（後書き）

ちよつとぐだぐだになりましたが、次回で観測者編終了です。
そして、第二章からはリメイク前同様「世界をまわらせよう」と思
います。手始めに学園都市ですね。

Last Chapter: Go to new world!

「腑抜けたな」

と、観測者は外樹に言った。その真意はつかめない。機械のように冷たい仮面には、感情が伺えない。

「オマエは殺す価値もない。そのまま墮落し、ヒトとして生きていろ」

そう言つて、観測者は去つた。その真意も、本意も、何一つ掴めない。その無機質さが、その異常さを際立たせていた。

残された外樹は、ただ、立ち竦んでいた。

最後に観測者が遺した言葉。「学園都市。そこに行け」

そのことだけが、耳に引っかかっていた。

オッレルスとシルビアに一言謝り、彼はそこを出た。転移の魔術を生成し、そして転移先を設定する。

「移動」

その一言で世界は変わる。彼のいた風景はガラリと変わり、人の集まる会議室のような場所に着いた。そこにいた面々は彼もよく知る、イギリス清教の幹部である。そして、長方形の机の一番奥に座っていた女性——ローラースチュアートは外樹の姿を見て、ひどく安堵したようにため息をつき、少なくとも彼女は、彼をねぎらう言

葉を掛けるために立ち上がった。

だが、その瞬間にその喉元にダガーが突きつけられる。

「学園都市に、オレを連れていけ」

長机の端から端までの距離を一瞬にしてゼロにした外樹の手に握られたダガーは、実際に殺す気がないことを意味していた。何故彼がそうまでして学園都市に行きたがったかはローラには解らない。少なくとも、昨日までの外樹は学園都市の存在を知らないはずだ。

——まあ、いい。

彼女はこほんと咳払いする。

「仕事の依頼だ、傭兵」

そう言って、彼女は外樹を見つめた。

「そして、私はオマエの雇い主だ。今から。コレを退ける」

その二時間後、外樹はげっそりとした表情で、それとは対照的にローラは嬉しそうな表情で外樹の部屋から出てきた。入る前と比べて、今のローラは少し艶っぽい。妻を持つ牧師はローラが中で何を行ったのかすぐに察したらしいが、それを口にだすことはしなかった。

彼女は疲れ気味の外樹の手をぐいぐいと引っ張って連れて行く。もう勘弁してくれと言わんばかりの外樹に対し、ローラは「仕事で稼げ、阿呆」と答えた。事実、ステイルはその時のローラに近づくことはなかった。嫌な予感を感じ取っていたから。

「……………」

「さて、今回君は土御門と同じようにイギリス清教に居ながら一般人サイドに位置するという、『中途半端』になった」

「……は？」

外樹は首を傾げる。ローラの瞳には冗談を言っているような節はなく、逆に今回の功績“だけ”でここの厄介になれるとは思ってい

なかった外樹としては願ったりかなったりであった。オツレルスの家で何があつたかは、知らないのだろうが。もしも生きていたらただでは生かせないだろうし、もしかしたらホルマリン漬けにされるかも知れない。少なくとも彼の板世界ではそうだ。

「それで、お前はこれから土御門と一緒に学園都市に行き、“スパイ”として働いてもらう」

その一言で、外樹にスイッチが入った。彼が「キャリアフリード」だったころの癖で、すぐに口が滑る。

「……報酬は？」

「は？」

外樹の言葉に首を傾げるローラ。それに対して外樹は小さくため息をつく、額に手を当てた。本格的にスイッチが入ったようだ。こうなった彼は止まらない。

「これでも私は傭兵だ。傭兵をスパイとして雇うというのならば、それなりの報酬を要求しよう」

「……私はそのようなことは聞いておらんが」

「聞かれていなかったからな。いくら身内になったからと言ってもこの流儀を変えるつもりはない」

「そうそう。月さんはそういうニンゲンなんだにやー」

と、突然湧いて出てきた金髪ツンツン頭のアロハ男。どこからともなく現れたこの男に対してローラは可愛い悲鳴を上げ、外樹は黙って三步ほど後退した。へらへらと笑う金髪男。白色を基調として作られているここ——イギリス清教の聖堂に置いて、アロハシャツを羽織り、その上に学生服を着ているという格好はとても不釣り合だった。

ボタンは留めておらず、鍛えあげられた腹筋が見事に晒されている。立ち住まいもどこか軍人を思わせる。そして、その全身に纏う抜身の刃のような雰囲気は、もしも殺気を出したなら常人くらいなら殺せるんじゃないか、と思わせるほどだった。

そして、なにより若い。この年でこんな殺気を纏うやつはあまり

いないんじゃないか……と土御門と同じくらいの年齢だった頃には彼の何百倍もの戦争の経験などを積んでいた彼は言う。

……改めて見ても、変態だな。外樹はひとり頷いた。

「ぷっ、ははははっ！ あの外樹がこんなに驚いているトコ初めて見たぜよ！！ 二人のなかよしタイムでしたかあ？」

「そんなわけがないだろう。……それで、ローラ。いつまで私の後ろで隠れているつもりだ」

「いや、だって、驚いて……」

「身内に対してそこまで驚くのはどうかと思うにゃー……」

シヨックだにゃー、と土御門。いつの間にか土御門は外樹の後ろに回っており、外樹も踵を返しているためにローラは土御門と外樹に挟まれる格好となる。

「あー……で、報酬はいくら欲しい」

「三百」

「三百ポンドか？ やけに——」

「時給三百ポンドだ。年間だといくらになるとおもう？」

啞然とした。そんな額を要求できるわけがない。年間£2628000——円に換算すると、約三億五千万円である。イギリス人の平均年収の約二十倍ときたら、イギリス清教の年間予算に匹敵するほどだ。

「払えないなら、そうだな——二百五十は？ これが及第点だ」

外樹はにやにやと笑いながら言う。その笑みは、遠まわしに『金額下げたら報酬分の働きはしない』と告げていた。それを察し、ぐぐ、とローラは唸る。この男の戦力は既に分かっており、誰にも気付かれずにドイツ・イギリス間を往復できるその能力も、他に渡すには惜しい人材だ。

土御門は、そんな外樹に啞然としていた。こんな法外な額を要求し、それで突っぱねられない。それほど能力を認められているのか——それとも、魔術か。土御門はそれを危惧し、魔力の反応を探る。が……感じられない。

（短期間で信頼勝ちとり過ぎだぜよ……）

小さく、笑う。

「払えないだろうな。ならば——年間三十万£で良い。そのかわり、私に単独行動権を与えろ」

「そのくらいなら、良いだろう」

外樹はニヤニヤとした笑みを消し、愛嬌のいい笑みを浮かべた。
（これでいい。これから行く場所は、ナニカ（・・・）がある）

外樹は土御門に目配せする。彼はサングラス越しにウインクをした。それに対し、外樹は小さく晒った。

「それじゃあ、最大主教。オレは外樹に学園都市について説明してくるにやー」

「あ、ああ。行ってこい」

ローラは一気に減った負担に安堵の溜息を突きながら土御門と外樹を見送った。

——あれ？ あやつら、歩き方が似ている……？

足音一つ立てず、扉の向こうへ消えた二人に、そのことを言うことは出来なかった。

「それで？ “オレ” たちはどこへ行かねばならない」

「ローラから聞いてないのか？」

「生憎と、アノ女は抜けたところがあるからな。オレとしてはもう少し説明を受けたかったが、そこに貴様が出てきたからな」

お互い、仕事をするときの言葉遣いで話す。外樹はコートの内ポケットから取り出した煙草に火をつけ、口元から紫煙をゆらゆらと伸ばしていた。彼らが今いるのは自然公園。勿論ポイ捨て禁止。

そのことに念を押すと、外樹は解っている、と短く返した。

「じゃあ、説明しておこうか。日本については——まあ、知っているよな。その首都の中央三分の一を占めており、他県にも跨ってい

る円形状の『都市』がある。そこを——学園都市というんだ」

改めて、外樹は眉をひそめる。その名前ならば筑波学園都市というものなら聞いたことならある。だが、そこまで大きくはないはずだ。

自分のいた世界とこちらの違いを実感している外樹の心中をつゆとも知らず、土御門は続ける。

「そこでは……こつちでいう、所謂『超能力者』を人工的に開発している。全人口約二百三十万人。そのうち八割が学生だ。そして——そのうち六割弱が能力に目覚めて『いない』」

「つまり、全員が……念動力などに始まる『異能』に目覚めていないわけか」

「ま、それでも能力者の数は人口の二割。十分な数だがな。かく言うオレもその一人だ」

土御門はニヤリと笑い、親指で自分を指す。だが外樹は眉ひとつ動かさない。

「かなり微弱なようだが——まあいい。その『トップ』は誰だ」
何故微弱だと解ったのか。それを土御門は尋ねようとしたがそのような雰囲気ではなく、他のことを言えば外樹は質問を繰り返すだろう。

「アレイスター」「クロウリ」。——世界最高の魔術師であり、世界最高の科学者だよ」

忌々しげに土御門は言う。あの『人間』の顔を思い出したくもない、と土御門は吐き捨てた。

「アレイスター……か。ふむ……」

外樹は小さく呟くと、顎に手を当てた。土御門は、それが何かを思い出すような仕草に思えてならなかった。

二人の間を、そよ風が通り過ぎた。

「——それで、出発はいつ頃になりそうなんだ？」

「ああ、今日」

「……はあ!？」

それを早く言え! と外樹は怒鳴ると、一瞬で姿を消した。

「……なにやら忙しいことになりそうだにゃー」

土御門は微笑を浮かべ、小さく欠伸をした。

今日は、いい天気だ。

第一話：転生

舞月好巳は、所謂ドラッグジャンキーだった。違法薬物にとっぴりとつかり、いつもヤクをやっていないと落ち着かないほどで、彼はアンダーグラウンドの世界でないと既に生きていけなくなっていた。軍人だった彼の、筋肉質な体は今ではやせ細り、髭はぼうぼうに伸び、手入れのされていない髪と爪は、一昔前の乞食を連想させた。既に年は四十を超えている。彼に未来はなかった。

彼がドラッグに手を染めたのは戦時中だった。苦しみを紛らわすためにアシッド>>LSD<<をやったのが彼の間違いだった。彼はそれ以後事あるごとにアシッドを使い、それでは足りなくなっていた。その頃に戦争が終わったが、彼は脱走し、麻薬のバイヤーのもとで戦闘員として働くことになった。

彼は軍人だったため重宝された。また、根っこの性がバトルジャンキーであった点も高く買われ、一日三度の食事とドラッグを保証された。既に彼は、それに満足する程度に墮落していた。

それから二十年。彼はついにバイヤーに捨てられた。最後にやったのがヘロインだったため、暗澹たる感情にとりつかれていた。（もう、何もすることはない。なにも、のこされていない）

彼は、自殺をすることに決めた。

往来に向かう。舗装されていない地面から土煙が舞い上がり、目に埃が入る。だが、彼はそれにも無反応だった。

その時、彼の横からサッカーボールが飛び出した。そして、それを追った幼い黒人も。そして、極大なクラクション。子供が引かれることを予測した彼は、咄嗟に飛び出て、子供を突き飛ばした。

そして、真横から突っ込んできたトラックに轢き殺された。彼の名前を知るものはおらず、しかしスラムの人々の間に、彼は英雄として讃えられた。その話はまたたく間に広がり、三日後にはそのスラムの地区全体に広まった。

その三日の間、舞月好巳は三途の川を美人の舟漕ぎと共に渡っていた。彼は不思議と二十歳頃の肉体をしていた。あの、視るものに嫌悪感を与えていた顔つきは凜々しいものに戻り、骨と皮同様に鳴っていた彼の肉体は軍人の頃のそれに戻っていた。黒と赤のオッドアイは、濁りのない宝石のような色合いをしている。サラサラとした黒髪は艶々しく、視るものに美青年の印象を与えていた。

美人の舟漕ぎもその一人だ。彼女は心が個々まで揺れ動いた経験はなく、エンマに許され、この美青年——舞月好巳が自分と同職になるのを願うばかりだった。

だが、その三日目。

彼女と談笑していた舞月好巳は、忽然と姿を消した。

彼女はそれが何であるかを理解し、悲しみに包まれた。そして、一人、元きた道を戻ることにした。

その時、彼女は気づく。船の、彼の座っていたところに美しい水晶のような球体が転がっているのを。不思議に思い、彼女はそれを手にとった。そして、すぐに気づいた。

——彼の記憶だ。

彼の記憶……思い出が塊となって、彼女のもとに残されたのだ。彼女はそれを、彼からの好意と思い、それを懐に入れ、それから大事にした。

余談だが、彼女の漕ぐ船には、不思議と、温かい“なにか”も同伴しているという噂が船渡しの間でなされた。

Where is here? ここはどこだ。先ほどまで話していた女性は一体どこへ消えた。というよりなんで一面真っ白なんだ。先ほどまで三途の川を美人の橋渡しに送ってもらっていたと思ったら、突然切り替わった景色に対して俺は困惑していた。

えーっと、思いだせ、まずここはどこだ、俺は誰だ。

さっきまでいたのは、三途の川ってー場所で、死者の通る最初の道。たまーに振り下ろされて激流に飲まれて魂ごと消滅っていうバカも居る……だったか。ってことは、俺、死んでるのか？ ……訳が解らん。

というか、アレ？

俺、誰だ？

重大な事実気がついた。あのべっぴんさんと話している記憶以外ねえじゃねえか！ よし落ち着け、俺、素数を数えろ。とりあえず今頭の中にある情報を整理しろ。

「おい」

えーっと、まず美味しいドラッグの種類だろ？ おいしいドラッグカクテルの配合だろ？ そんなもってイギリス帝国万歳……って、あれ？

「……おい」

軍事関連と麻薬関連が大半を占めてるって、なんで？

……生前の俺って一体何なんだ。

「聞こえているのか、死人」

「はい！？」

漸く気がついた。先程から変なノイズが度々聞こえていたと思ったら、どうやら目の前に居る人物が呼びかけてくれていたようだ。それと、俺を死人と呼ぶ辺り、あれか、エンマ大王かそれともキリスト様か、はたまた神様か。もしも前者だったらクレームつけてやる。

「とりあえず、私は貴様の想像しているような存在ではない。……観測者だ」

「観測者？ Observerってことか」

自らを観測者と名乗った人物は、先ほどの女性と同じくらいに綺

麗だった。艶やかな銀髪はくるぶしまで伸びていて、その薄白い肌は惜しげも無く晒されている。スラリと伸びた手足、銀髪で隠されているが、ちらりと見えるうなじや鎖骨は色っぽい。秘部や胸部はうまい具合に銀髪が隠しているが……

裸だった。

東洋人風の目鼻立ち。濁りのない墨汁のような瞳が、俺をじっと見つめていた。

「……ふむ、お前はこういう体が好きなのか」

「Oh, god! What's going on! I can't believe!!」

信じられない。どストライクだ。今すぐ押し倒したい本能を寸でのところで押し留めて、俺は紳士然と話しかける。

「抱かせて!」

「何が紳士だこの変態めが。というより貴様の考えている『会ってみたい人物』がこんなだとは……何故私はコイツを呼んだのだ」

頭を抱える銀髪の女性。胸があと少し、あと少しで見える……っ

! イギリス人の恥だとは思いつつも、軍隊でいつも野郎に囲まれていれば女にも飢えるさ! さあてどう口説こうか……?

俺が口説こうとしていることに気づいたのか、女性は咳払いしてから、指をパチン、と鳴らした。するといつの間に着たのか、彼女は真っ白なワンピースを着ていた。

「とりあえず、お前に質問が幾つかある、答える」

「Sir, yes sir!」

軍隊時代の癖で敬礼する俺。……軍隊時代? 記憶はないが、そうか、俺は軍隊に所属していたのか。なるほど、この筋肉モリモリな肉体もそれで納得がいった。

彼女が俺に質問した内容は、簡単なものだった。記憶はあるか、名前は解るか、自分が死人だと理解しているか、この三つだった。

「……ふうむ、非常に困った」

困った? いったい何が困るのだろうか。……まさか、

「記憶もないような男に抱かれたくないとか？」

「万が一にもその可能性はないな。……しかし、まあ相方がキレぎみだったから、まあこんな程度でいいだろう。」

お前の名前は「舞月好巳」だ。日本出身のイギリス人、死んだ場所……どこだここ、スラムか？ うん、そんなところだ。

それでだな、死んだあとに、なんか超小規模の英雄になっちゃったから、あなたに三つの選択肢を与えることにします」

ほう、俺英雄になったのか。生前の俺は一体どういう奴だったのだろうか、もしかして超のつくほど善人？ ……麻薬とかの知識があるってことはヤクをやってたってことだから、まあ善人ってことはないだろう。

麻薬の売り手の間で伝説になったんだろうか。しかし、軍人が伝説になるという例など効いたことがない。ジェネラル・トウゴウとかなら納得がいくが……

「選ばせてもらえる権利ってのは？」

それが気になった。観測者とやらは、どうやら死人を同行するだけの権利はあるようだ。冥土の中でもかなりの重役のようだ。もしかして神様か、こんな神様だったら毎日お祈りするよ、いや本当。

彼女は右手の人差し指、中指、薬指を立てた。そして俺に向けると、その薄桃色の唇と舌を動かし始めた。

「一つ、さっきの美人の橋渡しと結婚して橋渡しの職業をやること。一つ、物凄い力を手に入れてへんてこな物語に足をつ込むこと。

一つ、——記憶を復元して、元いた世界とは違う世界に生き返ること」

「四つめの『あなたを抱く』で」

「そんな選択肢はない」

くそ、だめか。

俺は残念がりつつ、とりあえず何を選択するか吟味する——はずもなく、即答した。

「三つ目」

「そついうと思つてたよ」

観測者は笑うと、指をパチンと鳴らした。そして、ふつ、と宙に浮いた。何が起きたのかと思つて下を見ると、ぽっかりと、穴が開いていた。……え、なにこれ、落ちろと？

「ちょ……」

「行つてらつしゃーい。せいぜい相方の気晴らし程度にはなつてねーん」

「つとおおおおおおおおおお！」

絶叫を気にせず、ニコニコ笑顔で彼女は手を振っていた。思わず、それに見とれた。

……後から、別の選択肢にすればよかったと思つた。なんせ、記憶が戻っていないのだから。そもそも麻薬の知識があつた時点で俺は気がつくべきだったのだ。

自分が、想像できる程度の人生を歩んできているわけではないということに。

第一話：転生（後書き）

はい、まさかの新キャラ登場。そして急展開。

しばしの間外樹や魔術サイドにはご退場願ひまして……

次回から第一・五部「サバイバル編」、始動です。

N y a r l a r t h o t h p（旧名音繰）さんとのコラボ回。まさか一部まるまる使ってコラボするとは思ひもよらなんだ。

間話「偽物」

舞月好巳という男を飛ばしてから、真っ白な空間には観測者一人になった。ようやく一息つけると思ってた彼女はコーヒーを淹れ始める。だがそれを邪魔するように、ぽむっ、と可愛い音を立てて緑髪の少女が現れた。

「……何の用事があってここに来た、四季映姫」

四季映姫と呼ばれた少女はつかつかと観測者に歩み寄ると、彼女を睨んだ。

「ご自分でもお解りでしょう」

「文句なら後で聞く。……アレは、ああする宿命にあった」

宿命。その言葉に四季は眉をひそめる。常日頃から宿命という言葉を忌み嫌う彼女がその言葉を使ったことに対して、四季は訝しんだ。『観測者』の表情は苦々しげに歪んでいる。

「記憶を消して、別の記憶を植えつけて生まれ変わらせる。——偽物として生かすつもりですか」

「彼が誇り高き軍人であったことはよく知っているがね。こうするしかない」

女の観測者はカップにコーヒーを注ぐと、ゆっくりと口元に持つ

ていく。だが、柔らかい唇をそれにつける前に、視線を四季に向ける。

「たとえ偽物でも、本物の感情は持てるだろう？」

微笑し、彼女は琥珀色の液体を口腔に流しこむ。その香りを味わってから喉に通し、途端眉を顰めた。

「……やっぱり、苦いな」

「舞月外樹の真似事ですか」

その言葉を出すと、『観測者』の表情が変わった。恥ずかしかったようで、顔が赤くなっている。四季は「すみません」と頭を下げつつ笑い、その瞬間彼女の飲みかけのコーヒーがぶっかけられた。

「あつっつっつっつっつっつっつっつっ！？」

「うっさい。静かにしなさいな」

「いきなり何するんですか、火傷になりますよっ！」

「あ」

「『あ』じゃなあああああい！ 黒！ 黒！ 真っ黒！ この人死刑！」

「法律は私に通用しないっ！」

じゃれあう二人。そこに、音も立てずに『観測者』がやってきた。

舞月外樹と瓜二つのその男は、体中に深い切り傷や打撲痕があった。息は荒く、地面に足をつけた瞬間にどさりと地面に倒れる。

「ちょちょ、どうしたのさ！」

慌てて女の観測者が『観測者』に駆け寄る。四季は呆然としていた。あまり傷のある人間を見たことのないのだろう。女の観測者がときばきと手当てをする中、『観測者』は、突如、気が狂ったように笑い出した。

錯乱状態にあるのか、と女の観測者は考える。だが、外樹は心底嬉しそうに言った。

「息子だ——」

「……は？」

「私の息子は、この私と同等以上に戦えたのだ！ 親として喜ばないはずがないだろう！ くくく、オレの遺したモノも使いこなしておつて！ 親として、男として！ これ以上に喜ばしいことがあるだろうか！」

——生きがいを、見つけたぞ」

ぎらぎらと、観測者の瞳は燃えていた。消え去っていた彼の闘志が、魔術師として死んだ彼を戦士としていた。

女の観測者を支えに、彼は立ち上がる。そして、叫んだ。

「オレは誰でもない！ オレは、『舞月外樹』だ！ 観測者になったとしても、これだけは消し去れんぞ、『神』よ！」

白い空間には、彼の哄笑が響き渡った。

四季映姫の瞳には、彼が修羅に見えた。全身から血を流し、鬼のような瞳をする彼が。

二時間前

舞月逢悖は自分の父親を探し回っていた。数年前に彼の前に現れ、彼との死闘を繰り広げたあと、謎の遺言を残して消えていった父親を探すには、彼一人では明らかに手が足りなかった。しかし彼は父親に教えられた探索術式で世界中を探した。

(……けれど、いない)

舞月外樹の痕跡ならある。しかし、本人はどこにもいない。彼は考えた。ならばどこにいるだろうか。

——異世界だ。

そこしかない、と彼は考えた。異世界渡航の術式ならば以前教えられたはずである。それを応用して探索術式を平行次元にまで伸ばすというのもひとつの手かもしれない。

そのようなことを考えていた彼の前に——

——件の、父親が現れた。

その背中からは白と黒の一对の翼が出ている。右手にはグラディウスを大きくしたような大剣が握られており、その服装は彼が見たものとは違い、拘束服のような白いものだった。音も立てずに彼は降り立つと、大剣を逢悖に突き付ける。

「よう、親父」

「久しいな、逢悖」

逢悖の服装は戦闘向けではなかった。草鞋わらじに甚平、そして腰の両側には刀が差してある。脇差はない。だが彼は、戦う気でいた。

「あまり詮索しないでもらいたいのだがね。少々、困る」

「プライバシーの侵害ですってか？ 笑わせる。家族にんなモノ必要ないといったのはアンタだろう」

「そうだった、な」

突如、お互いがお互いの行動を察知していたかのように、同時に動いた。逢悖は走り、左側の白い刀で外樹に居合斬りをする。対し、それに対応するように外樹は体験の腹でそれを受け止める。瞬間、荒野に荒々しい声が響き渡る。逢悖はそれだけで止めず、目にも留まらぬ速さで次々と斬撃を繰り出す。大剣ではその速度に対応でき

ず、外樹の体に裂傷が刻まれていく。

そして、大ぶりの一撃を小手先に繰り出す。外樹はそれをいなし、逢悸の腹部を蹴り飛ばして距離を取った。

逢悸が優勢だった。しかし、彼は眉を顰めたまま、傷だらけの父の姿を見る。

「……おまえ、誰だ？」

「何？ 面白い事を聞くな。自分の父親の顔も解らなくなったというのか」

愉悦に口を歪め、外樹は逢悸に尋ねる。だが、彼は静かに首を振って、言う。

「俺の知るアンタは、大剣なんて使わない。動きもまるで違う。鈍い、鈍すぎる。」

それになんだ、その翼は。気味の悪い。アンタの美的センスが狂ったとは思えない。まるで偽物だよ、アンタは。

剣を抜け。息子に容赦するような男じゃないだろう。

—— 驕るなよ。仮にもお前の血を引いているんだ」

静かに、怒りを震わせて彼は言う。外樹はその言葉を聞いて、きょとん、と目を丸くした。そして、数秒ほど逡巡していたが、ついにこらえきれず、笑い始めた。

「何が可笑しい」

その行動に首を傾げる逢悻。だが、ひいひいと笑いを堪えようとしながら、外樹は言う。

「私が、偽物！ 確かにそうだ！ 私は一度殺さ（・）れ（・）た（・）！ そして、別のモノとして、蘇りたくもないのに、そうさせた！ そうだ、そうだ確かにそうだ。だが、――

そう、私は、私だ。

オレは、舞月外樹以外の何者でもない！」

声が止まった。同時に、空气中を伝わっていた振動がピタリと止んだ。逢悻は、外樹に何かがあったのだとは察知していたが、先ほどの叫びからその一端を予想し、そして、恐ろしくなった。

（まさか――『神』との契約を？）

『神』。あるいは『世界』。あるいは『真理』。あるいは『根源』。様々な言葉で表されるが、その実、それは一つだけを表している。言語に表すことにできない「」。それとの契約は、伝承によると次の通りだ。

――其の者、神と契りを交わし大いなる力を得、時というしからみから逃れる。

――だが、代償に其の者は老いの知らない、不死の体を手に入れ

る。

——そして神の下僕しもへとなる。

逢悻を初め、人々はこれを人間の根源的な願いを叶えてくれる契約だと考えていた。神の下僕と言えども不老不死となり、時間という概念から解き放たれる。そして、“大いなる力”を手に入れる。だが、その実態は違った。

神の下僕とは名ばかりで、実質奴隷。天国に行くことすら赦されず、地獄——煉獄に行くことすら赦されない。死者以下の扱いをされ、悠久の時を観測し、その内容を神に伝える。そんな生活。記憶が消されるのならば苦痛は減るが、それすらできない。

まるで、地獄のような生活。

逢悻の父親である舞月外樹は、死んではいなかったが、既に観測者の身だった。そのため、彼は既に悠久と形容できる時間を過ごしてきた。

生きている間はまだいい。だが、世界に「死んだ」と認識された時が最後、彼は本当に「奴隷」としての生活を送ることになった。

『観測者』の翼が砕ける。大剣にヒビが入り、外樹がそれを振るった瞬間に刃は吹き飛んだ。

そして——その背中から、黄金こがねと黒の混じった、泥で作られたような翼が生える。先程の大剣の柄に、黒いエネルギー体が集まっていき、彼の手に馴染んだ刀を形作っていく。辺りに黄金の粒子が撒

き散らされ、荒野が一瞬で作り変えられていく。

「——ああ、思い出せたよ。逢悸。……『オレ』の作られた意味、そして与えられた能力。そして今までの人生のすべてを。感謝する、息子よ。」

気がかりなのは、あちらの私だがな。恐らく彼も『世界』を内包する容器だ。ならば私と同じ力を持ってもおかしくないが……」

後半は独り言のようで、「あちらの私」だの、「『世界』を内包する」だの、逢悸には理解できなかった。だが、理解できるのはただひとつ。

——この身を貫くような殺気が物語っている。舞月外樹が、「本物」となったことだ。

世界が塗り替わる。荒野が草原へと変わり、空には神々しく輝く球体が浮かび、空を彩っている。

逢悸がそれを認識した瞬間には、もう外樹は動いていた。

彼の刀は両断されていた。厚さ三ミリの剣先から、太く伸びる柄、そしてそれを握る指ごと、外樹の持っていた刀は切り裂いた。

痛みを感じるよりも早く。彼の太もみに弾丸が撃ち込まれる。腰に差していた黒い刀にも次々と弾丸が撃ち込まれ、見るも無残に破壊された。

「……おや？」

逢悸には何が起きているのか解らなかった。先ほどまで圧倒していたのは自分のほうだった。しかしどうだ。自分の足は動かず、刀は砕かれた。まるで牙をもがれた獣だ。何が起きているのか理解出来ない。一体どうなっている、相手はどうやって動いた。そんな考えがぐるぐると回っていた。

「『白虎』と『黒龍』をお前が置いてきたということは、あれが破壊される“運命”、はないようだ。つまり、あちらの私もあの二刀を持つ。——成程、いいことを知った。

逢悸、オレの目を覚ましてくれた礼だ。いいことを教えてやる。

——オレはどこにでもいて、どこにでもいない」

そういうと、外樹は姿を消した。朦朧としている逢悸には、最後の一言しか聞き取れていなかった。

間話「偽物」（後書き）

サバイバル編の構想がまとまりました。長らくおまたせしてごめんなさい。

五ヶ月も更新停止していて、見る人も殆どいないとは思いますが、どうぞこれからもよろしく願います。

第二話「殺戮」

そこは戦場だった。強能力者（レベル3）以上と解る能力が飛び交い、少年たちが生きるためにお互いを殺しあう戦場。^{サバイバル}その参加者の一人——古川白夜は逃げ回っていた。彼は——これに参加している人間は——もともと「置き去り（チャイルドエラー）」と呼ばれる、学園都市の孤児だ。その中でも、強能力者以上の人間が学園都市統括理事会に招集された。

白夜は初め、自分たちに奨学金が出され学校に通えるチャンスを与えられるのではと考えた。だがそうではなかった。十七学区の操車場に集められた彼らは突然、殺し合いをしろ、と命令を受けた。彼と同じ孤児院にいた少年は反発したが、どこから現れた人型のロボットのような機械が現れ、ショットガン——その形はあきらかにショットガンとは違ったが——で彼の体を吹き飛ばした。それで気が狂ったのか、皆殺し合いを始めた。

殺されないために。

（みんな、狂ってる）

白夜が小さく呟いた。だが、その瞬間に彼の頭上を発火能力者の火が掠め、——恐らく能力で操作されているのであろう石ころが、猛スピードで飛んでくる。彼は能力を使うことなくそれを避け、昨日壊れたはずのコンテナの影に隠れて様子を伺った。顔を出せば、まっさきに狙われることは目に見えている。

この壁の外側では、みんなが殺し合いをしている。自分とは関係ないものと信じたい。けれど、僕が生き残っていると知れば、彼らは僕を狙うだろう。

つい先日まで、白夜はただの「置き去り」で、孤児院の中でもおとなしくしているタイプだ。そんな彼にいきなり「殺し合いをしろ」と言ったとしてもそんなことができるはずがない。

白夜の隠れているコンテナを叩くように、音が聞こえてきた。彼はそれを聞くと、危険を承知で戦場のど真ん中を横切って他の安全地帯に逃げるか、それとも戦うかで迷った。時間は限られている。しかし彼には決めきれなかった。

もう遅い。

閃光。衝撃。爆音。横殴りの衝撃波が白夜を襲う。近くの別のコンテナに彼は叩きつけられた。それを白夜が認識するのに時間はなかった。横からかけられる声に、彼は反応できない。自分の体の状況がどうなっているのかも知らない。

だから、彼は突如発生した、白い粒子に気づくことが出来なかった。

光が虚空から一箇所に集まり、人の姿を形作っていく。「彼らは、それに気づき、自然と手が止まっていた。一体何が起きている。

これも統括理事会の行った何かなのだろうか。彼らはあまり学園都市の技術というものを知らない。そのため、本来のものより誇張したイメージを持っている。

そのために、ワープ技術やら何やらがあるのだろうと子供心ながらに思っていた。

だから、その粒子が人の形を取って、ほんとうに人が現れたとしてもあまり驚かなかった。むしろ興味を持っていた。現れたのは、日本人のような黒髪の、赤と黒のオッドアイの男。その服装は一面黒ずくめで、子供の考える『殺し屋』のそれだった。

彼らに「殺し屋」というイメージを植え付けたのはもうひとつの理由がある。彼の腰には大きな拳銃がホルダーにかけられていたからだ。コルトガバメントという、学園都市では古い（・）拳銃を持つ人間が何故ここに……？ ミリタリー系に詳しい「彼ら」の一人はそう思った。

男はしばらくきよろきよると辺りを見回していた。

（……どこだ、ここは）

先程まで、周りは戦闘状態にあったようだ。見れば、まだ年の若い少女たちばかりである。男は何故彼らが争っているのか気になった。立ち上がり、近くに立っていた少年に声をかけようとする。

だが、それは叶わなかった。

吐き気。頭痛。脳の内側に棒を入れられてかき混ぜられているような感触。彼の脳裏に様々な光景がフラッシュバックした。戦場で

争う記憶。銃弾飛び交い、空では戦闘機がドッグファイトを行なっている。平原で、街道で、塹壕で、草原で、凍土で、砂漠で、海上で、空中で、泥中で、湿原で、戦った記憶が。

大英帝国、日本帝国、ソビエト連邦とフランス、ドイツ、イタリア連合軍の全面戦争。それに中華人民共和国が参加し、全世界を巻き込んだ戦争となった。そして、その最前線で、自分は戦い続けた。時として戦車を使い、時として戦闘機を使い、時として重火器を使い、時として刀剣を使い、戦い続けた。

そして、すべてが終わりやってきたのは世界恐慌。

麻薬に浸かり、戦場で戦い続けた自分は一人の乞食として死ぬことになる。

彼は全てを思い出した。「偽物」の記憶と気づかず、しかし彼はそれを「本物」と思い、そして——急激に襲ってきた渴きが、彼を支配する。

禁断症状に近いものだった。彼は周囲にいる者の全てが敵に見えていた。コンテナの積まれた操車場が戦地に、辺りに佇む少年少女は哀れな少年兵に。

彼は、ホルダーからガバメントを抜くと、真横にいた少年の心臓を撃ちぬいた。続けて数発撃ちこみ、少年の頭部は弾丸に決り取られた。その横で倒れこむ少年がいたが、男は彼には見向きもせず、先ほど殺した少年のブーツの内側に入っていたナイフを奪うと、それを逆手に持った。

そして、コンテナの上で彼を見下ろす少女に肉薄し、彼女が接近

に気づく前に、その首を深く切り裂いた。

血が吹き出す。スプリンクラーのように血が吹き出す。「彼ら」がそれに気づくには時間を要した。いきなり現れた男性が、突然「彼ら」の一人を殺した。もしや誰かの味方をするのかと思ったが、そうではなく、無差別に殺人を始めた。

離れている敵もガバメントの弾丸で撃ち殺し、獣のように飛び交い、ナイフでその命を断つ。彼は五秒で、――無抵抗とはいえ――十人も殺した。一秒に二人の計算。神業に近い。

「彼ら」が男は敵だと気づき、行動を始めたのはその時だ。頭の良いものはその場を離れ、操車場という広い、広すぎるフィールドのどこかに隠れ、しかし目の前に現れた新たな敵を倒すために行動を起こした者もいた。

「彼ら」の総数は百を優に越している。そのうち逃げたのがたった二十数名である。「彼ら」の精神状態は極限状態に近くなっていたために、正常な判断ができなかった。そのために、本能的に「勝てない」と解る相手に戦いを挑んだ。

数は力というが、それは圧倒的な暴力の前には無駄である。男に歯向かうことを選んだ「彼ら」は、己の能力を男に向ける。ある者はペットボトルの水を操作して、それを無数の弾丸として発射する。ある者は空気中の酸素と体内電気を反応させ炎を発生させ、火球を作りそれを撃ち出す。ある者は空気中の埃が持つ電気を利用し、数千ボルトの電気を発生させ、雷のやりを撃ち出す。

多様な攻撃が男に向かう。それが着弾し、粉塵を撒き散らす。攻撃の中には爆発系統の攻撃もあったようで、辺りに轟音と衝撃波が

撒き散らされる。この一瞬だけ、殺し合いをしていた「彼ら」は団結していた。

だが、男が死んだのならその必要はない。「彼ら」はまた戦いを始めようとし――

「キキ、クカカハハハハハハ——ッ！」

奇声を発しながら、男が百メートル離れた発火能力者の腹を切り裂き、腸を抉り出していた。その表情は愉悦に染まっており、弾丸を外すことなく「彼ら」の脳天や腹部など、致命傷を与えていき、近場の敵に肉薄し、様々な殺し方で、残酷に、しかし容赦無く潰していく。

古川白夜はそれを見て、小さく「化物」と呟いた。

殺し合いの戦場は、殺戮場となっていた。

第二話「殺戮」（後書き）

音なんちゃらさんの作品、「とある雷炎の第四支配」プラスマルラーとのコラボ章が始まりました。こちらの出す新キヤラの名前が悉く「舞月」などには色々と理由がありますのでご了承ください。

また、これと平行して第二章（本編）も同時に進めていけるようにする予定です。乞うご期待。

とある雷炎の第四支配URL↓<http://ncode.syosetu.com/n58600/>

第三話「サバイバル」 前編

殺戮は続いていた。初め八十人ほどいた「彼ら」は既に半数近くに減らされていた。彼の殺戮が起きている間、彼らは一度も殺しあっていない。共通の敵を相手にして、チームワークは皆無にしろ、お互いの邪魔にならないように攻撃を行なっている。

しかし、それが仇となっていた。「彼ら」の中にも肉体操作系の能力者はいる。近接戦闘では恐らく彼を上回るであろう。だが、それは少数派で、その殆どは遠距離での戦闘を得意とする能力である。応用すれば彼らも近接戦ができるかも知れないが、この三日間、彼らは未だ遠距離戦しか行なっていない。

伸び代はある。才能もある。だが、彼らはそれを伸ばしていない。それでは、経験も、才能も、伸び代も——戦いの中で新たな戦い方を生み出すといったものだ——を持つ男に勝てるはずがない。

それが、旧時代の、それもナイフと拳銃というシンプルな装備をしている相手であっても。

だが、突如として空中から、白い何かが降ってきた。人の形をしているそれは、しかし分厚い鉄板に覆われている。男はそれを見ると、その「敵」の姿を分析し始める。初め、彼はそれが無人口ボだと考えた。だが、それならばわざわざ人形ひとがたに似せる必要はない。多脚にしたほうが圧倒的に有利である。その事から、彼は中に人がいるものだと推測する。

人の体を防護するように、円筒を幾つか繋げた格好をしているそれは、人体を効率良く動かすには程遠く、無骨な、凹凸のあるフォルムをしている。腕や足を守るシールドのような板が分厚い鉄の上に貼り付けられている。見れば、円筒状の鉄は質が悪く、細部の接続が上手くいっておらず、内側の精密機械が見えている。防護用のカバーが掛けられているが、そこを上手く突けばエラーを引き起こすことはできるだろう。

彼の知っている武装鎧パワーアップと呼ばれる鎧はこの敵によく似ている。ただ、武装鎧が、運動性と防護性などを兼ね備えた「完成形」に近い、一種の「作品」だ。それに対してこれは未完成のものだろう。恐らくまだ研究途中のものなのだろう。

背中についているバックパックに「敵」が手を伸ばすと、それが開き、内側から五十口径ほどのショットガンが飛び出す。その形は近未来的で、従来のものが単発式であるのに対して、リボルバーを彷彿とさせる回転式弾倉シリンダーが使われている。見えている弾丸の直径から考えて装弾数は十発。

『武器を捨てて投降しろ。危害は加えない』

スピーカー越しの言葉が辺りの静寂を破る。その言葉に、数秒思案を巡らせた彼は、黙ってナイフを捨て、ガバメントのカートリッジを外し、「敵」に向かって投げつける。「敵」はそれを受け取ると、男の持っている予備カートリッジも渡すように促す。

男はそれも渡し、ホルスターに拳銃を戻すと、両手を上げて、頭の後ろに組んだ。それをみて、投降の意思があることを認めた「敵」は、ゆっくりと、警戒しながら男に近づく。手振りで仲間にシヨツ

トガンを構えておくことを促し、彼のボディチェックをする。何か武器を隠し持っていては、これから連れて行く場所で何かされては困るからだ。

その瞬間、「敵」――^{パワーアップ}駆動鎧の男は油断仕切っていた。だから、武器を持たずに、男に対して一瞬、警戒を解いた。

その機を伺っていた彼は、分厚い防護ガラスに彼の肘鉄を叩きこむ。いきなりの攻撃に困惑した駆動鎧の男に対して、同じ箇所にもう一度肘鉄を叩き込み、鎧の頭部と腹部の接続部の踵を打ち込む。衝撃に弱いセンサーを狙った一撃は彼の予想通りエラーを引き起こし、一瞬、メインコンピュータがダウンする。

だが、黙っているわけではない。銃を構えていた、別の駆動鎧は好已を狙って散弾の雨を浴びせる。弾丸一発に数百発の小さな弾が詰まっているそれは、ただのショットガンではなく学園都市製の武器なのだ。一撃一撃が戦車砲のそれとまではいかなくとも、匹敵するだけの威力はある。

それを、男はダウンした駆動鎧を盾にすることで防御した。後方から大口径の弾丸が撃たれたが、音の方向から方向を予想し、身を捻らして回避する。ポールを中心にグルグルと回るようにして駆動鎧の攻撃を回避していた彼は、手にしていた支柱が使い物にならなくなったことを見ると、そのショットガンを奪い、引き金を引く。

その反動は大きく、男の左肩の関節が脱臼するほどだった。だが骨折までには至らず、片手が動かなくなるだけで済む。それに対して放たれた弾丸は彼を狙っていた駆動鎧の人間の頭部を守る防護ガラスに致命的な罅をいれる。それを見た好已はすぐさま肉薄し、ガバメントの尻でガラスを砕くと、中にいる人間の首を掴み、引きず

りだそうと引つ張る。

彼の目論見はこうだ。敵の武装鎧を奪い、自分が装備し、それで反撃を行うというものだった。だが、彼の知る武装鎧と違い、学園都市の駆動鎧は人間一人一人に対する反応が異なる。予め登録された筋組織や神経系のデータなどから人物を認証し、駆動鎧そのものを人体と認識するように脳に信号を送る。その際、抜けないように全身に圧力をかける。

いつまでたつても引っこ抜くことが出来なかった彼に、駆動鎧の一撃が入る。当たらなければどうということはないが、当たれば致命傷となるのだ。

男はその一撃で気絶した。しかしその表情は、依然として笑みが浮かんでいた。

『こちらP S - 12隊三番、目標を確保。これより帰投する』

駆動鎧の男――山手は仲間が「捕獲」した男の姿を見る。小型のキャパシティダウンをつけている箱の中に詰め込まれた男は、抵抗された時のために両足首を碎いている。だが、目を覚ませば駆動鎧の一つ二つを破壊する、といったほどの所業はするだろう。先ほどの行動から、山手は男の実力を把握していた。

だが、不可解なことがある。この男がどこから、どのようにして

現れたのか。突然巨大な「歪み」が観測されたと思ったら、男が出てきた。そのことから考えて空間移動系の能力者ではないことは確かで、先ほどの「殺戮」からも彼が能力者ではないことが解る。

では、一体何者だ？

（……ま、この短時間でこれだけ殺したんだ。それに先ほどの動きを見ても、上が欲しがる理由はわかるね）

パワーブースツ

駆動鎧が起動し、彼の殺戮の場にたどり着くまでにかかった時間は十分ほどだ。その間に彼を囲んでいた強能力者（レベル3）以上の能力者を——戦闘慣れしていないとはいえ——四十人ほど殺すというのは並の人間ではできるはずがない。それに加え、人間の反応速度を優に超えたスピードでの攻撃を仕掛ける駆動鎧の攻撃を難なく躲した。

確かに、最後はその駆動鎧にやられたかも知れない。だが彼が駆動鎧のデータを手に入れていたならば、結果は違っていただろう。

『三番、着いたぞ。運べ』

『了解』

だがなんにせよ、自分には関係のない話だ。この男が例えこれから暗部に落ちようとも、人体実験の犠牲になろうとも。

第三話「サバイバル」 前編（後書き）

久々に原作キャラを出しました。「ブロック」の山手ですが、解る人いますかね？

もう少し積極的に出したいものの、あまり関わらせるとチートスペックの好已に秒殺されるフラグが立つので残念。

第三話「サバイバル」中編

目が覚めると、知らない天井だった。つい先程記憶が蘇り、形容しがたい渴きに襲われた俺は先ほどまで人を殺していたはずだ。愛用のガバメントはいつもと変わらずいい具合の反動を与えてくれていて、それが快感だったことを覚えている。

俺は、人を殺すことを快感に思っている。どんな麻薬のカクテルよりも気持ちのいいことだ。ぶにぶにとした動脈をナイフで切り裂き、その内側にある骨に触れ、傷を抉る。相手の上げる悲鳴がどの幻聴よりも心地よい。人肉の感触は生暖かく、内側から溢れ出る生温かい液体は幻覚を見て感じられるどんなものよりも生命というものを感じさせる。

……いや、こんなことはどうでもいい。俺は軍人なんだ。こんな人間の異端のようなことを考えること自体がおかしいのだ。冷静になれ。今の俺の体は、麻薬の味を覚えているだけの一般人だ。

——脳内麻薬でいけるだろうか——？

いかんいかん、俺は何を考えている。

ようやく俺は自分の状況を確認する。辺りは暗く、ぼんやりとした電灯が辺りを照らしている。俺の両手は手錠で塞がれており、身動きは取れる状況ではない。さて一体どうしたものかと思っていた

ら、突然、辺りが光に包まれた。

どうやら照明がついたようだ。ストロボを複数ヶ所から一斉に焚かれたようなもので、一時的に視界が奪われる。数秒後、だんだんと目が光に慣れ、辺りの様子がはつきりとしてくる。

ここは、何かの研究施設のようだった。辺りには様々な機械類が置かれてある。視線を巡らせて周囲を見ていたが、「気がついた？」という声が正面から聞こえた。

「誰だ？」

「名乗るほどのものじゃないわよ。私はただの『案内人』よ」

見れば、そこには赤いツインテールの少女がいた。高校の制服を羽織っており、胸はサラシを巻いている。ふくよかな胸がそれで抑えつけており、どこかエロティックだった。

どうやら視線に気づいたようで、少女は自分の胸元を腕で隠し、顔を赤らめる。ギャップ萌えというのだろうか、思わず「可愛いな」と言ってしまうていた。

「からかわないで」

「本音だよ。……それで？ どこに案内してくれるんだ」

話を戻す。

「窓のないビルよ」

——彼女はそう言ったが、俺にはそれが一体何なのかさっぱり理

解出来ない。そんなビルがあつてたまるかと思う。そんなことを考えていると、少女が俺に近づき、手で頬を触れる。いきなり何をするのかと思つたら、急に視界が暗転した。

突如襲ってくるのは嘔吐感。手で口を抑えようとするがそれは適わずに、必死で嘔吐するのを我慢する。先ほどの少女が不安気に「大丈夫？」と聞いてきたが、耳に入らない。

「まあ、しょうがないわよ。この感覚に慣れるのには時間がかかるだろうし。ましてや、能力開発の受けていない人物なら慣れることすら無理かもね」

何を言っているのかよくわからない。

「理事長、連れてきたわよ」

『ご苦労。下がれ』

偉そうな声が聞こえてきた、何とか上体を起こして、声のした方を見る。

……辺りが明るくなったり暗くなったり、目が安定しない。だから、そのせいで俺が見間違えたのだろうと思つた。

そこには、巨大なビーカーの中に逆さまに浮かぶ、男とも女とも取れない「人間」がいた。

「え、なに、お馬鹿さんですか？」

『いきなり言ってくれるな』

これが、俺のアレイスターⅡクロウリーとの出会いだった。

第三話「サバイバル」中編（後書き）

一人称超難しいです。泣きそう。

あわきんかわいいよあわきん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6733l/>

二人の舞月の住む世界

2012年1月8日20時48分発行